一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書９

大西大師山遺跡（18・19号横穴墓）
城ヶ谷遺跡（2区）

2017．6

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

1. 大西大師山遺跡 19 号横穴墓（調査後全景：南西方向を見る）

2. 城ヶ谷遺跡 (2 区)(空撮：遺跡上空から北東方向を見る)

序

現在、一般国道9号の大田市朝山町～久手町間については、緊急時の代替路線の確保、医療・観光・物流活動の支援を目的として、中国地方整備局松江国道事務所では山陰自動車道の一部である朝山・大田道路を平成19年度に事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

この報告書は平成28年度に実施した大田市久手町波根西に所在する大西大師山遺跡（18・19号横穴墓）と、同市久手町刺鹿に所在する城ヶ谷遺跡（2区）の発掘調査成果をとりまとめたものです。今回の調査では古墳時代の横穴墓や集落跡を検出し、当時の生活の様子を考える上で貴重な資料を得ることができました。本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査および調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成29年6月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所　小　林　　寛

序

本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、平成28年度に実施した一般国道9号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

本書で報告する大西大師山遺跡（18・19号横穴墓）は、平成26・27年度に調査を実施した大西大師山遺跡において、新たに発見された古墳時代の横穴墓です。

また、城ヶ谷遺跡（2区）は、大田市久手町の丘陵上に所在する集落跡で、古墳時代後期の建物跡や、移動式竈など当時の生活の様子を示す多くの遺物が確認されました。本報告書がこの地域の歴史を解明していくための基礎資料として広く活用されることを願っております。

現地での調査や本報告書の作成にあたり御協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、大田市教育委員会、地元の方々並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成29年6月

島根県教育委員会
教育長　鴨木　朗

例　言

1．本書は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成28年度に実施した一般国道９号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、大西大師山遺跡 (18・19 号横穴墓)（大田市久手町波根西 2490-9 番地ほか)、城ヶ谷遺跡（2 区）（大田市久手町刺鹿 3010-22 番地ほか）の成果をとりまとめたものである。

2．調査組織は次の通りである。

調査主体　島根県教育委員会

平成 28 年度　現地調査

［事　務　局］　萩　雅人（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長)、渡部宏之（総務課長）
池淵俊一（管理課長）

［調査担当者］　林　健亮（調査第三課長)、秦　愛子（調査第三課臨時職員)、小川一樹（同）
幸村康子 (調査第一課臨時職員)

3．現地調査および整理作業において、以下の方々からご指導いただいた。(所属・役職名は当時)
西尾克己（大田市教育委員会教育部石見銀山課嘱託)、野島智美（同社会教育課主任）

4．大西大師山遺跡（19 号横穴墓）と城ヶ谷遺跡（2 区）の発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、掘削、測量等）については、島根県教育委員会から株式会社堀工務店に委託した。

5．挿図中の北は、測量法による第Ⅲ平面直角座標系 X 軸方向を指し、座標系の XY 座標は世界測地系による。また、レベル高は海抜高を示す。

6．本書第 2 図は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図（石見大田) を使用して作成した。

7．本書に掲載した写真は各調査担当者のほか、株式会社ジェクトが撮影した。

8．本書の執筆は第 1 ～ 5 章を林、第 3 章 3 及び第 4 章 2 の一部を秦が執筆した。

9．本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管している。

10．平成 27 年度に発掘調査を行った大西大師山遺跡 17 号横穴墓から出土した柄頭または鞘尻金具の一部と考えられる金属製品について、クリーニング及び保存処理が終了したが、『大西大師山遺跡』2016 年 12 月刊行に掲載できなかったため、本書の写真図版 27 に掲載した。

凡　例

１．遺物実測図の断面は、土師器を白ヌキ、甑をアミカケ、須恵器を黒塗り、石製品は斜線で示している。

２．本書で用いた土器の分類及び編年観は下記の論文・報告書に依拠している。

（１）弥生土器

松本岩雄「7 出雲・隠岐地域」「８石見地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』 木耳社　1992 年

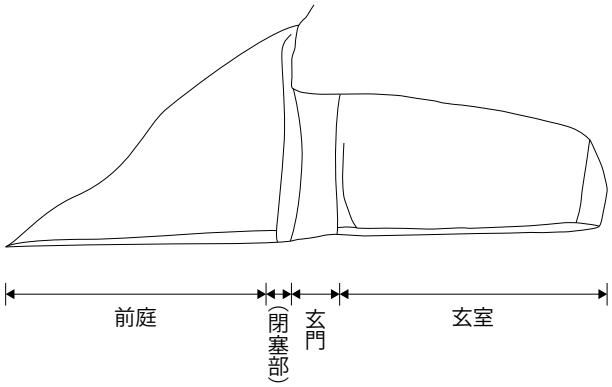
（２）土師器

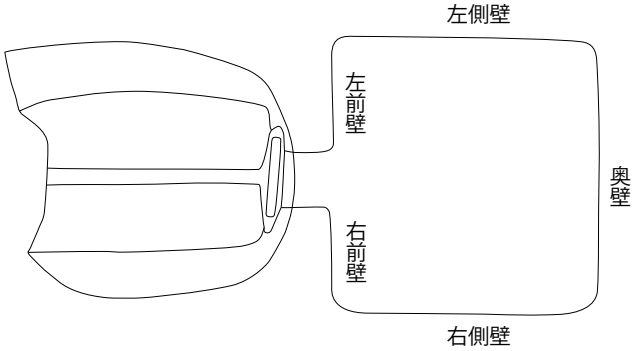
『九景川遺跡』島根県教育委員会　2008 年

（３）須恵器

榊原博英「石見国の須恵器生産と出雲産須恵器」『出雲国の成立と国府成立の研究』 島根県古代文化センター 2010 年

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第 11 集』 島根考古学会 1994 年





目　次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1
大西大師山遺跡（18・19 号横穴墓） …… 2
城ヶ谷遺跡（2 区） …… 2
第２章　大西大師山遺跡・城ヶ谷遺跡の位置と歴史的環境 …… 4
第３章　大西大師山遺跡（18・19 号横穴墓）の発掘調査 …… 8
１．遺跡の概要 …… 8
２．遺構 …… 10
18 号横穴墓 …… 10
19 号横穴墓 …… 13
３．19 号横穴墓出土遺物 …… 15
４．小結 …… 15
第４章　城ヶ谷遺跡（2 区）の発掘調査 …… 17
１．遺跡の概要 …… 17
２．遺構・遺物 …… 17
SI01 上層 …… 20
SI01 上層出土遺物 …… 20
SI01 …… 22
SI01 出土遺物 …… 24
SI02 …… 26
SI02 出土遺物 …… 26
その他の遺構・遺物 …… 28
遺構に伴わない遺物 …… 29
３．小結 …… 31
第５章　総括 …… 33
１．大西大師山遺跡（18・19 号横穴墓） …… 33
２．城ヶ谷遺跡（2 区） …… 36

挿図目次

第 1 図　大西大師山遺跡・城ヶ谷遺跡の位置 …… 1
第 2 図　大西大師山遺跡・城ヶ谷遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 5
第 3 図　大西大師山遺跡遺構配置図 …… 9
第 4 図　18 号横穴墓付近地形測量図 …… 10
第 5 図　18 号横穴墓土層断面図 …… 11
第 6 図　18 号横穴墓実測図 …… 12
第 7 図　19 号横穴墓付近地形測量図 …… 13
第 8 図　19 号横穴墓土層断面図 …… 13
第 9 図　19 号横穴墓実測図 …… 14
第 10 図　19 号横穴墓出土遺物実測図 …… 15
第 11 図　城ヶ谷遺跡調査区配置図 …… 18
第 12 図　城ヶ谷遺跡（2 区）遺構配置図 …… 19
第 13 図　城ヶ谷遺跡（2 区）南壁土層断面図 …… 20
第 14 図　SI01 上層遺物出土状況・土層断面図 …… 21
第 15 図　SI01 上層出土遺物実測図 …… 22
第 16 図　SI01 遺物出土状況・土層断面図 …… 23
第 17 図　SI01 実測図 …… 24
第 18 図　SI01 造付け竈実測図 …… 25
第 19 図　SI01 出土遺物実測図 …… 26
第 20 図　SI02 遺物出土状況 …… 27
第 21 図　SI02 実測図 …… 28
第 22 図　SI02 出土遺物実測図 …… 29
第 23 図　城ヶ谷遺跡（2 区）SI01・02 以外の遺物出土状況 …… 30
第 24 図　東斜面土層断面図 …… 30
第 25 図　遺構に伴わない遺物実測図 …… 31
第 26 図　大西大師山遺跡横穴墓位置図 …… 33
第 27 図　大西大師山遺跡横穴墓一覧 …… 34・35

表目次

第 1 表　大西大師山遺跡（19 号横穴墓）出土遺物観察表 …… 39
第 2 表　城ヶ谷遺跡（2 区）出土遺物観察表 …… 39

写真図版目次

1. 大西大師山遺跡（18・19 号横穴墓）

図版１　18 号横穴墓発見直後の状況
18 号横穴墓発見直後の内部の状況
図版２　18 号横穴墓前庭部土層堆積状況
18 号横穴墓玄室内土層堆積状況
図版３　18 号横穴墓閉塞石の状況
18 号横穴墓閉塞部
18 号横穴墓閉塞石除去状況
図版４　18 号横穴墓前庭部完掘状況
18 号横穴墓前庭部完掘状況
18 号横穴墓前庭部作業風景
図版５　18 号横穴墓右側壁
18 号横穴墓右前壁～右側壁
18 号横穴墓左側壁～奥壁
18 号横穴墓奥壁の加工痕
図版６　19 号横穴墓発見直後の状況
19 号横穴墓前庭部土層堆積状況
図版７　19 号横穴墓玄門付近土層堆積状況
19 号横穴墓玄門付近
19 号横穴墓前庭部
19 号横穴墓前庭部完掘状況
図版８　19 号横穴墓閉塞部右壁
19 号横穴墓左前壁～右側壁
19 号横穴墓左側壁
図版９　19 号横穴墓完掘状況
19 号横穴墓調査後遠景
図版１０　19 号横穴墓出土遺物

城ヶ谷遺跡（2 区）

図版１１　調査前全景
調査前近景
南壁土層堆積状況
図版１２　SI01 上層土層堆積状況
SI01 上層土層堆積状況
SI01 上層遺物出土状況
SI01 上層遺物出土状況

図版１３　SI01 土層堆積状況
SI01 土層堆積状況
SI01 遺物出土状況
SI01 作業風景
図版１４　SI01 遺物出土状況
SI01 造付け竈土層断面
SI01 造付け竈検出状況
SI01 造付け竈完掘状況
図版１５　SI01 床面検出状況
SI01 完掘後作業風景
図版１６　SI01 完掘状況
SI02 付近土層堆積状況
SI02 検出状況
図版１７　SI02 作業風景
SI02 遺物出土状況
SI02 完掘状況
図版１８　ピット 01 土層断面
東斜面土層堆積状況
城ヶ谷遺跡 (2 区) 空撮
図版１９　SI01 上層出土遺物（１）
図版２０　SI01 上層出土遺物（２）
図版２１　SI01 出土遺物（１）
図版２２　SI01 出土遺物（２）
図版２３　SI02 出土遺物（１）
図版２４　SI02 出土遺物（２）
図版２５　遺構に伴わない遺物（１）
図版２６　遺構に伴わない遺物（２）
図版２７　大西大師山遺跡 17 号横穴墓出土柄頭または鞘尻金具の一部
柄頭または鞘尻金具の一部　X 線画像

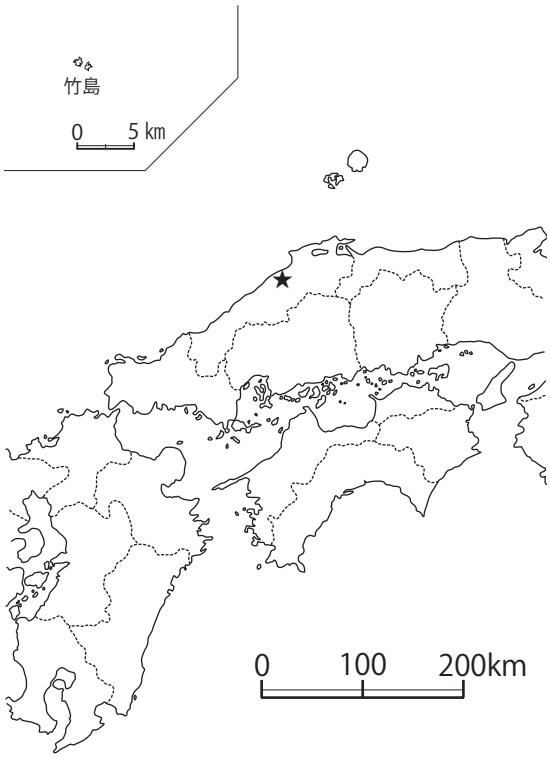
第１章　調査に至る経緯と経過

国道９号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長約 750km で、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。しかし近年は、都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、このため都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、その様相は島根県下出雲市及び大田市周辺においても例外ではなくなっていた。特に出雲市と大田市の境である仙山峠付近は急カーブが連続するため交通事故が多発するなど交通の難所とされ、平成 18 年７月には地滑り災害により全面通行止めとなるなど主要幹線道路としての機能に支障をきたしている。このような課題を解決するため、交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、また、今日的な課題となっている災害時緊急連絡としての機能を発揮させるために国土交通省により朝山大田道路 (延長 6.3km、大田市朝山町朝倉～大田市久手町刺鹿）の整備・建設が計画されて事業化が図られ、平成 18 年３月に都市計画決定された。

この計画・事業化に当たり、国土交通省から島根県教育委員会に対して、平成 19 年度に朝山大田道路建設予定地内の遺跡の有無について照会があった。これを受けて島根県教育委員会では大田市教育委員会の協力の下、平成 19 年度以降、数次にわたり予定地内における遺跡の分布調査を実施した。その結果、要注意箇所の９ヵ所を含めて全部で 22 ヵ所の調査対象地を確認し、国土交通省に回答した。

以後、この結果を受けて、国土交通省と島根県教育委員会の間で適時協議が行われ、予定地内の埋蔵文化財調査について、具体的に検討が行われた。協議の経過の中で、平成 22 年３月 12 日付け国中整松一官第 272 号で文化財保護法第 94 条第１項の規定による通知が国土交通省から文化庁長官あてに提出された。それに対し、平成 22 年３月 12 日付け島教文財第２号の 74 で、島根県教育委員会教育長から 13 遺跡の記録保存のための発掘調査の実施が勧告された。

その後の協議を経て、島根県教育委員会では平成 22 年度から予定地内の発掘調査を開始することとなった。平成 22 年度には中尾Ｈ遺跡（1・2 区）を、平成 23 年度に市井深田遺跡、門遺跡、高原遺跡 (1 区) を、平成 24 年度には荒槇遺跡、鈴見Ｂ遺跡 (1 区)、高原遺跡（2 区）を、平成 25 年度には中尾Ｈ遺跡（3 区）、鈴見Ｂ遺跡（2 区）、旭山遺跡を、平成 26 年度には中尾Ｈ遺跡（4 区）、門遺跡、城ヶ谷遺跡（1 区）、涼見Ｅ遺跡、神谷遺跡、大西大師山遺跡の西半部、高原遺跡（3 区）について発掘調査を実施した。この間、『門遺跡・高原遺跡 (1 区)・中尾Ｈ遺跡（1・2 区）』、『荒槇遺跡・鈴見Ｂ遺跡（1 区）・市井深田遺跡』、『鈴見Ｂ遺跡（2 区）』、『高原遺跡（2 区）』の発掘調査報



第１図　大西大師山遺跡・城ヶ谷遺跡の位置

告書を刊行している。また、各年度に、国庫補助を受けて事業地内に含まれる周知の埋蔵文化財包蔵地や要注意箇所の試掘調査を実施し、調査箇所の把握に努めた。

平成 27 年度には大西大師山遺跡の東側約 3,600㎡について発掘調査を行うとともに、平成 25 年度に調査を行った『旭山遺跡・中尾 H 遺跡（3 区）』及び平成 26 年度に調査を行った『神谷遺跡・涼見 E 遺跡・城ヶ谷遺跡 (1 区)』の報告書を作成した。

平成 28 年度には、1 班が、平成 26 ～ 27 年度に実施した大西大師山遺跡の報告書作成事業を行うとともに、他班が、用地買収などの都合で着手できなかった遺跡の発掘調査を行うこととなった。鈴見 B 遺跡（3 区）は、平成 28 年 5 月 10 日から 7 月 5 日に調査を実施し、古墳時代後期の加工段などを検出した。また、城ヶ谷遺跡の東側部分については、国庫補助を受け、平成 28 年 6 月 27 日から 7 月 20 日の間に試掘確認調査を行い、約 2,600㎡の対象地に 9 ヵ所のトレンチを設定した。

大西大師山遺跡（第 18・19 号横穴墓）　大西大師山遺跡の報告書作成作業中だった平成 28 年 10 月 12 日に、掘削工事中の大西大師山遺跡付近で陥没が発生したという連絡が国土交通省松江国道事務所から県土木部高速道路推進課にあり、未発見の横穴墓が開口している可能性が高まった。埋蔵文化財調査センターでは直ちに国土交通省松江国道工事事務所と協議の上、急遽発掘調査を実施することとなり、平成 28 年 10 月 19 日付けで変更契約を締結し、平成 28 年 10 月 20 日から 10 月 28 日までの間に発掘調査を実施した。この時の調査は、約 62㎡を対象に実施し、横穴墓 1 基を検出した。この横穴墓は、前年度までの調査に続けて 18 号横穴墓とした。18 号横穴墓からは遺物は出土しなかった。

さらに平成 28 年 11 月 16 日に同様の陥没が発生し、再度、平成 28 年 11 月 24 日から 12 月 2 日まで、28㎡を対象に調査を行った。調査の結果、横穴墓 1 基を検出し、19 号横穴墓とした。19 号横穴墓の前庭部からは須恵器小片が出土した。

城ヶ谷遺跡（2 区）　城ヶ谷遺跡は、大田市久手町刺鹿の低い丘陵上とその西向き斜面に位置する遺跡である。西斜面部分（1 区）については、平成 26 年度に発掘調査を行い、近代の陶器・瓦を生産した連房式登窯を含む工房跡と古墳時代後期の集落跡を発掘調査したが、尾根上については、用地買収と保安林解除手続きの都合で調査を実施することができなかった。この部分については、平成 28 年 6 月 27 日に国土交通省に所有権が移転したことから、保安林内の作業許可が取得でき、試掘確認調査を実施し、9 ヵ所のトレンチを開けた。この結果、このうちの 1 ヵ所から明確な落ち込みと移動式竈と思われる土師器片を検出したため、約 230㎡について本発掘調査を実施することになった。これを受けて、平成 28 年 10 月 19 日付けで国土交通省中国地方整備局松江国道事務所との間で変更契約を締結し、城ヶ谷遺跡（2 区）として平成 28 年 12 月 6 日から発掘調査を実施した。現地調査は、年末年始の中断を挟み、平成 29 年 1 月 20 日まで行った。この間、平成 29 年 1 月 16 日に大田市教育委員会西尾克巳・野島智美両氏の調査指導を受け、1 月 17 日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。

両遺跡とも、耕作土の除去はバケットに平爪を装着したバックフォーを使用し、遺物包含層の掘削は、主に鍬を用いて人力で掘り下げたが、遺物が集中する箇所は草削り・移植ゴテで掘り下げた。平面図は、遺跡調査システム「遺構くん」を用いて測量し、出力後補正を行った。必要に応じて手測りで平面図を作成し、その他報告書掲載が見込まれる遺物は遺跡調査システムで出土位置を記録

した上で取り上げた。遺構の写真は、原則として 35mm デジタルカメラで撮影し、必要に応じて記録保存のため 6 × 7 判フィルムカメラによる撮影も行った。

遺物整理作業は、平成 28 年 10 月から開始し、途中、城ヶ谷遺跡（2 区）の現地調査を挟んで平成 29 年 3 月まで行った。

報告書作成は DTP 方式を採用し、遺物図面は実測図を、遺構図面は平面図・断面図等をレイアウトした下図をデジタルトレースした。デジタルトレースや図の加工などは Adobe 社製 Illustrator CS5・Photoshop CS5 を用いた。遺構・遺物写真はデジタルカメラで撮影した後、Photoshop CS5 を用いてコントラスト調整し EPS データ化した。最終的な原稿執筆、編集作業は Adobe 社製 In Design CS5 を用いて行った。

第２章　大西大師山遺跡・城ヶ谷遺跡の位置と歴史的環境

大田市の海岸部は中国山地縁辺部の小丘陵を縫うように流れる小河川により形成された谷地形が連続している。久手町から波根町の間に広がる旧波根湖は、昭和 26 年に干陸化されてからは広々した水田地帯となっているが、元々は潟湖だったことが判っている。徐々に砂州が発達し、近世頃には完全に日本海と切り離され、淡水湖になったと考えられる。湾入していた中世以前には港湾があったようで、1592 年頃に明で成立したと言われる『日本風土記』には港湾の可能性がある地名として「番祢（波根か）」「山子介（刺鹿か）」などが見えるほか、現在でも「大津」など港湾が存在したことを思わせる字が残っている。

旧石器・縄文時代　大田市域では旧石器時代の遺跡は知られていないが、平成 26 年度に行った中尾 H 遺跡 (4 区)[註 1] の調査では、尖頭器が出土しており、縄文時代早期から旧石器時代に遡る可能性がある。大田市域では三瓶山の厚い火山灰層に覆われ、旧石器時代の遺構の検出が困難だと思われてきたが、今後の資料の増加が期待される。その三瓶山北麓では三瓶小豆原埋没林が発見されており、炭化木片について 4310 ± 80BP の年代が測定[註 2] され、この頃に三瓶山の大規模な噴火があったことが推定される。

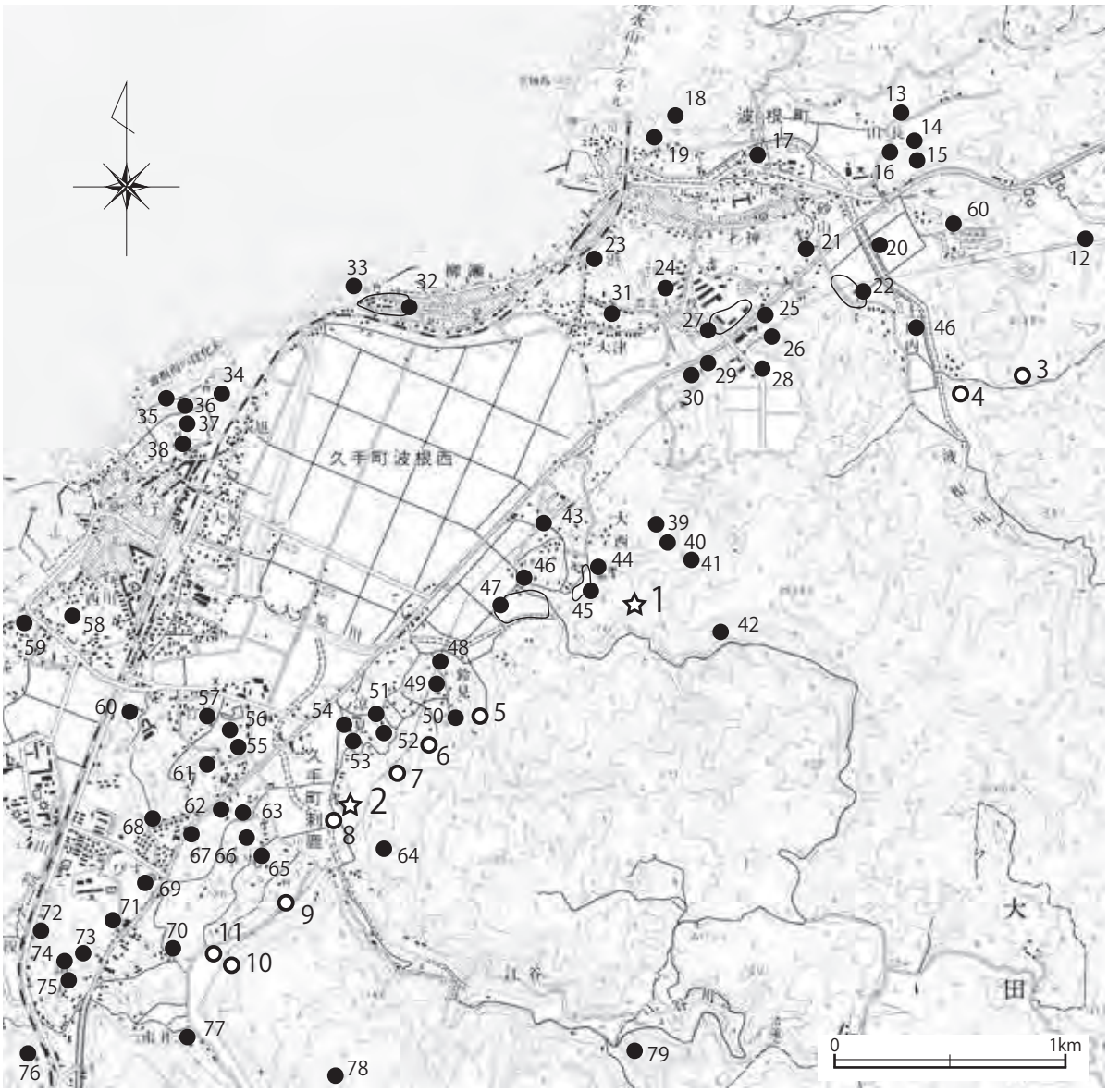
大田市では、近年になって縄文時代遺跡の発見が急増している。波根川遺跡[註 3] では 1984 年に行われた河川改修工事中に磨消縄文土器が採集されていることが近年になって報告されたほか、門遺跡 (9) や高原遺跡 (4) でも縄文土器が出土している。中尾 H 遺跡 (11) の出土遺物は縄文後期を中心に、縄文前期･中期に遡る土器も含んでおり、年代幅の広い遺物群が確認されている。また、出土遺物には、石に線刻によって絵を描いたと見られるものや、大型石棒なども含まれており、当時の精神世界をうかがう可能性もある資料として注目されている。こうした資料の急増から、三瓶山北麓の丘陵地帯から海岸部にかけては、広範囲にわたり縄文時代の人々が活動した様子が想像され、今後も縄文時代の遺跡の発見が増加する可能性が高い。

弥生時代　旧波根湖周辺では弥生時代の遺跡として確認された例は多くはないが、三瓶川や静間川下流域の平野部には、土江遺跡（大田市長久町土江）・八日市遺跡（同静間町八日市）など弥生時代に集落が営まれていたと考えられる遺跡が存在する。また、大田市鳥井町の丘陵部に展開する鳥井南遺跡では、弥生中期から古墳後期にかけての大規模な集落跡が発見された。弥生時代の遺構には、焼失住居が含まれているほか、備後北部で見られる塩町式土器が多数出土し、備後北部と交流が推定される。弥生後期の竪穴建物跡からは鉄製鋤先が出土し、大量に出土した土器とともに重要な資料となっている。

朝山大田道路の発掘調査では中尾 H 遺跡 (11)・門遺跡 (9)・荒槇遺跡 (8)・高原遺跡 (4) から弥生土器が出土しており、特に江谷川に面した荒槇遺跡では弥生時代を通じた遺物が見られ、波根湖南岸に弥生集落が継続して営まれていたことがうかがわれる。

古墳時代　旧波根湖の西岸には、この地域で唯一の前半期古墳とも推定される竹原古墳 (56) がある。直径 40m、高さ 3m 以上の円墳[註 4] と推定されており、大田市域では最大級とされている。旧波根湖沿岸地域で竹原古墳以外に墳丘を持つ古墳の存在は知られていなかったが、平成 26 年度には涼見 E 遺跡 (7) で、土師器小型丸底壺を伴う小規模な古墳が調査されている。

旧波根湖の南岸に続く丘陵部は、石見地方でも有数の横穴墓の密集地帯として知られている。現



1　大西大師山遺跡　2　城ヶ谷遺跡　3　旭山遺跡　4　高原遺跡　5　鈴見Ｂ遺跡　6　神谷遺跡
7　涼見Ｅ遺跡　8　荒槇遺跡　9　門遺跡　10　市井深田遺跡　11　中尾Ｈ遺跡　12　大暮遺跡
13　前谷Ｂ遺跡　14　前谷Ｃ遺跡　15　幸迫谷横穴群　16　前谷Ａ遺跡　17　江奥遺跡
18　金比羅山横穴群　19　東灘遺跡　20　田長遺跡　21　砂口遺跡　22　上川内遺跡　23　中浜遺跡
24　砂山遺跡　25　天王平廃寺　26　高砂遺跡　27　松田谷横穴群　28　西迫横穴
29　中山曽根横穴　30　熊屋谷横穴群　31　大津遺跡　32　柳瀬西遺跡　33　鰐走城跡　34　旭遺跡
35　刈田神社裏山Ａ遺跡　36　刈田神社裏山Ｂ遺跡　37　刈田神社裏山遺跡　38　刈田神社横遺跡
39　銭神山横穴群　40　暮石横穴群　41　近谷遺跡　42　六曽根遺跡　43　大西Ｄ遺跡
44　大西大師山横穴群　45　大西Ａ遺跡　46　大西Ｂ遺跡　47　大西Ｃ遺跡　48　鈴見Ａ遺跡
49　鈴見上ヶＡ遺跡　50　涼見上ヶＢ遺跡　51　涼見Ｄ遺跡　52　涼見Ｂ遺跡　53　涼見Ｃ遺跡
54　涼見Ａ遺跡　55　竹原Ｂ遺跡　56　竹原古墳　57　竹原Ａ遺跡　58　新田Ｂ遺跡
59　新田Ａ遺跡　60　市庭遺跡　61　竹原Ｃ遺跡　62　森ノ上遺跡　63　中尾Ｃ遺跡　64　岩山城跡
65　中尾Ｅ遺跡　66　中尾Ｄ遺跡　67　辻遺跡　68　中尾Ｂ遺跡　69　諸友大師山横穴群
70　中尾横穴　71　二中横穴群　72　鳥越Ａ遺跡　73　山田庫夫宅裏横穴群　74　鳥越城跡
75　諸友西横穴群　76　栗林Ｂ遺跡　77　市井遺跡　78　段山城跡　79　江谷横穴

第２図　大西大師山遺跡・城ヶ谷遺跡の位置と周辺の遺跡（1:25,000）

在、島根県立農林大学校の敷地になっている松田谷横穴群 (27) は、少なくとも 4 支群 15 穴が確認されており、耳環や玉類が出土している。諸友大師山横穴群 (69) でも 3 支群 15 穴が確認され、多量の土器類とともに、大刀などの鉄器類や玉類、石製紡錘車など豊富な副葬品が確認された。西迫横穴 (28) は、大田市域では少ない四注式切妻整正家形を呈し、整った 2 基の屍床を備えた大型の横穴墓である。平成 26・27 年度には大西大師山横穴群 (44) に続く丘陵部の大西大師山遺跡 (1) で 17 基の横穴墓を調査し、石製紡錘車をはじめ耳環や大刀などが出土した。

集落跡については、古くから上川内遺跡（高原地区）(22) (註 5) をはじめ、柳瀬西遺跡 (32)、大西 C 遺跡 (47) などで古墳時代の遺物の出土が知られていたが、朝山大田道路関係の発掘調査によって遺跡が急増している。古墳時代後期～古代の集落遺跡である市井深田遺跡 (10) や平成 26 年に発掘調査を行った城ヶ谷遺跡 (2) では、造付け竈を持つ加工段が発見されており、移動式竈や土製支脚と同時に造付け竈を使用していた可能性がある。一方、平成 25 年度に実施した鈴見 B 遺跡 (5) の発掘調査では造付け竈が見られず、近接する同時期の集落であってもその様相が一様ではないことが注意される。このほか、波根町上川内の高原遺跡 (4) や久手町刺鹿の門遺跡 (9)・中尾 H 遺跡 (11)・荒槇遺跡 (8) などで古墳時代の遺物が大量に出土しており、旧波根湖の南岸部が当時の人々の生活に適した環境だったことがうかがわれる。

古代　大田市東部は『和名類従抄』に安濃郡波禰郷・刺鹿郷と見える。旧波根湖は、古代には入海だったと考えられることから、この付近は水上交通を含め、交通の要衝であったことが考えられる。この旧波根湖を見下ろす位置に天王平廃寺 (25) があり、塔を含む 2 基の乱石積み基壇が発見されている。出土遺物には多量の瓦のほか、銅製の水煙が含まれており、大型の塔が建っていた (註 6) ことが判る。出土遺物には「大」をヘラ描きした瓦などが含まれている。

中尾 H 遺跡 (11) では「二斗一升二合」「石□（花カ）」と読める 031 形式の木簡の出土が注目される。この木簡に記された「石花」とは、石華＝カメノテと考えられることから、海産物のカメノテを貢納する際の荷札木簡と思われ、近隣に波禰駅や末端官衙などが存在した可能性がある。

平成 26 年度に発掘調査が行われた神谷遺跡 (6) では、4 基の横口付炭窯が発見され、古代の製鉄遺跡に関わる可能性が検討されている。通称ヤツメウナギとも言われる横口付炭窯は、出雲部では 4 遺跡が知られているが、石見部では初の発見である。横口付炭窯は、製鉄との関係が指摘されており、旧波根湖周辺での製鉄遺跡の発見が期待される。

中世・近世　現在までに大田市東部で中世前半の遺跡は多くは知られていない。城ヶ谷遺跡の西側に位置する荒槇遺跡 (8) では、中世の木棺墓を検出している。16 世紀になって石見銀山の開発が本格化すると、銀山の支配を巡って大内氏・毛利氏と尼子氏等が争い、大田市東部でも、上川内砦跡（旭山城跡）をはじめ、鰐走城跡 (33)、岩山城跡 (64) など多くの山城が造られる。上川内砦跡の直下に位置する旭山遺跡 (3) では、瓦質土器香炉や輸入陶磁器などが出土し、上川内砦跡に関わる中世末の寺院の可能性も推定されている。また、近くに位置する高原遺跡 (3 区)(4) では、16 世紀代と考えられる福光石製の石塔類 (註 7) を伴う基壇が発見されている。

大西大師山遺跡　大西大師山遺跡は旧波根湖から日本海を北西に見下ろす、標高約 70m の、東西に長い丘陵上に位置している。この丘陵は、旧波根湖に面した北斜面は風化した粘質土となっており、傾斜もやや緩やかになっているが、切り立った南斜面は広い範囲で凝灰岩の岩盤が露出している。丘陵の南から西側の直下は、南の狭い谷間から流れ出る大原川が北流しており、遺跡の西側

で旧波根湖に注いでいたと考えられる。大西大師山遺跡の位置する丘陵からＴ字形に北に延びる尾根も、東斜面に凝灰岩の露頭があり、4 基以上の横穴墓が開口する大西大師山横穴群 (44) が知られている。

平成 26･27 年度に実施した発掘調査では、計 17 基の横穴墓と、近代の石切場跡を調査している。前述の通り、付近には良質の凝灰岩が露出しており、この石を採掘した石切場跡は、周囲に何ヵ所か点在している。

城ヶ谷遺跡　城ヶ谷遺跡は、旧波根湖の南岸から南に延びる尾根上に位置している。現在の国道 9 号から南東に約 400m 離れており、尾根上の標高は約 45m である。遺跡の北側には旧波根湖が広がり、南側に迫る丘陵上には中世の山城である岩山城跡 (64) が位置する。西側には小さな尾根 1 本を挟んで、江谷川が北流している。江谷川右岸には古代の遺物を多く出土した荒槇遺跡 (8) が、さらに西から流れてくる支流市井川周辺には縄文から古代の遺物を出土している門遺跡 (9)、中尾 H 遺跡 (11) などが知られる。城ヶ谷遺跡の東隣の尾根上には、葺石を持つ小規模な古墳 2 基以上がある涼見 E 遺跡 (7) がある。

〈註〉

(1)　『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報』23　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　2015 年

(2)　『三瓶小豆原埋没林調査報告書』島根県県境生活部景観自然課　2000 年

(3)　渡辺　聡・糸川寿幸「波根川遺跡出土の縄文土器」『島根考古学会誌』第 29 集　島根考古学会　2012 年

(4)　『島根県埋蔵文化財調査報告』第 2 集　島根県教育委員会　1970 年

(5)　『大田市埋蔵文化財調査報告 1　上川内遺跡－田長・高原地区－』　大田市教育委員会　1981 年

(6)　註 4 に同じ

(7)　註 1 文献に同じ

〈参考文献〉

『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』　島根県教育委員会　2002 年

『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ　石見部製鉄遺跡』　島根県教育委員会 1984 年

『島根県中近世城館分布調査報告書〈第 1 集〉石見の城館』　島根県教育委員会　1997 年

『三瓶川流域遺跡他詳細分布調査Ⅱ』　大田市教育委員会　1984 年

『日本歴史地名体系第 33 巻　島根県の地名』平凡社　1995 年

『角川日本地名大辞典 32　島根県』　角川書店　1991 年

『門遺跡・高原遺跡Ⅰ区・中尾 H』　島根県教育委員会　2013 年

『市井深田遺跡・荒槇遺跡・鈴見 B 遺跡』　島根県教育委員会　2014 年

『高原遺跡（2 区）』　島根県教育委員会　2015 年

『鈴見 B 遺跡』　島根県教育委員会　2015 年

第３章　大西大師山遺跡（18・19 号横穴墓）の発掘調査

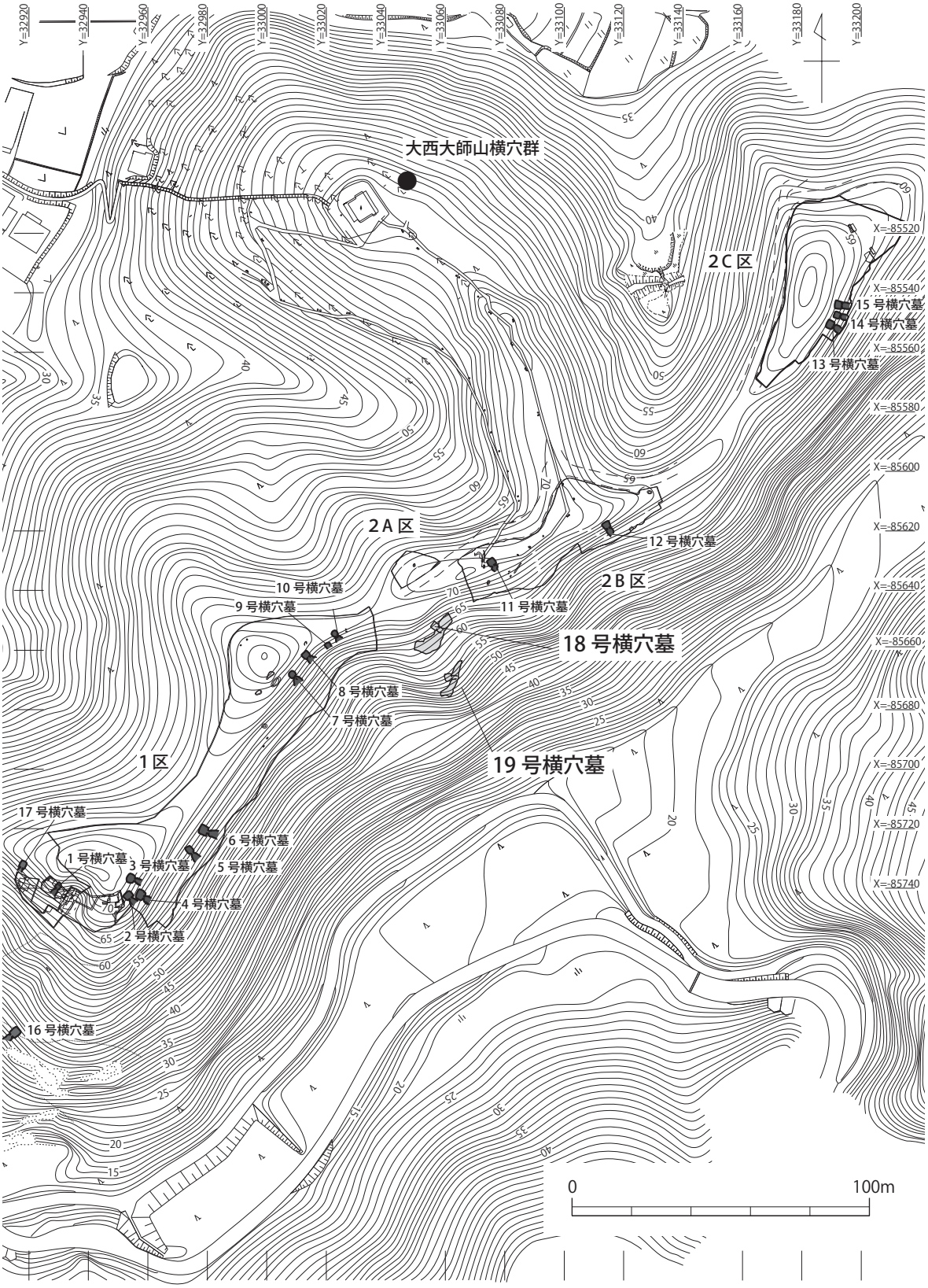
1. 遺跡の概要

大西大師山遺跡は、大田市久手町波根西に位置する横穴墓群を中心とした遺跡である。標高約70m の丘陵に位置し、遺跡の南側は山塊が迫り、切り立った狭い谷間を北流する大原川が、大西大師山遺跡のある丘陵にぶつかって、西に流路を変え、丘陵西端を回り込んで、北側の旧波根湖に続いている。大西大師山遺跡の位置する丘陵上からは、北に旧波根湖のあった水田地帯から、その先に広がる日本海を望むことができる。

大西大師山遺跡のある旧波根湖の周辺は、松田谷横穴群や西迫横穴、諸友大師山横穴群など多くの横穴墓群が知られており、石見東部地域では最大級の横穴墓密集地帯となっている。大西大師山遺跡やその周辺の丘陵にも凝灰岩の露出した場所が多くあり、暮石横穴群や銭神山横穴群などいくつかの横穴墓群が知られている。一方、横穴墓が造られた時代の集落跡については、以前は多くは知られていなかったが、近年になって朝山大田道路関係の発掘調査によって、城ヶ谷遺跡をはじめ、市井深田遺跡や鈴見 B 遺跡などが調査され、当時の様相が解明されつつある。

大西大師山遺跡は、東西方向に約 400m 続く長い尾根の南～西斜面に造られた横穴墓群で、今回の調査分を含め、18 基の横穴墓 (9 号横穴墓は前庭部のみで掘削を中止されている) が調査された。遺跡西側の 1 区を平成 26 年度に、東側の 2A・2B 区と、その調査中に不時発見された 16・17 号横穴墓を平成 27 年度に調査している。大西大師山遺跡で発見された全ての横穴墓は、下方に大原川が流れる狭い谷筋に向けて見られ、旧波根湖を望む北斜面には、横穴墓は知られていない。大西大師山遺跡の横穴墓は、尾根上の小さなピーク毎にまとまりがあり、近接した横穴墓２～４基毎に小支群を形成している。最も西側のピークから大原川を見下ろす南西斜面には 1・16・17 号横穴墓、2 ～ 4 号横穴墓、5・6 号横穴墓の 3 支群が、次のピークの南東斜面には 7 ～ 10 号横穴墓が、中程のピークの南斜面には 11・12 号横穴墓が、最も北東側のピークの南東斜面には 13 ～ 15 号横穴墓がある。今回調査した 18・19 号横穴墓は、11 号横穴墓の下方に当たる。また、12 号横穴墓付近から T 字形に北に延びる尾根の先端には遺跡名の由来となった大西大師堂があり、その東側斜面にも周知の埋蔵文化財包蔵地である大西大師山横穴群が知られている。大師堂直下の凝灰岩の岩盤に、現状では 4 基以上の横穴墓が開口している。

平成 26・27 年度の調査 (註 1) では、大西大師山遺跡の多くの横穴墓は尾根上のピークを後背墳丘としているように見え、ピークに近接した位置に造られているが、丘陵西端に位置する 16 号横穴墓は、ピークから 30 m も下った位置にある。また、大西大師山遺跡の横穴墓は、玄室の各壁面の界線が不明瞭で、隅の丸いものが多い。天井形態は、アーチからドーム天井に近いものが多く、家形やテント形は見られない。遺跡西側の横穴墓では、前庭部の先端が開くものが多く、東側の横穴墓には前庭部の狭いものが多いなど、小支群毎の特徴も見られる。多くの横穴墓で壁面に工具痕を残しており、荒掘り段階では刃先の湾曲した幅約 6cm の工具を用い、玄門から玄門幅で奥に向かって掘削し、その後に横方向に広げていくという工程が考えられている。横穴墓からの出土遺物には土器類をはじめ、大刀、刀子、鉄鏃、耳環などの金属製品や玉類のほか、2 号横穴墓からは石製紡錘車が出土している。石製紡錘車は、諸友大師山横穴群 (註 2) や松田谷横穴群 (註 3) からも出土しており、旧波根湖周辺で点々と見られる特徴的な遺物となっている。18・19 号横穴墓の直上に



第 3 図　大西大師山遺跡遺構配置図（1:2,000）

位置する 11 号横穴墓からは、須恵器類をはじめ、耳環や鉄鏃などの金属製品、管玉・切子玉・ガラス小玉などの玉類が出土している。

今回調査を実施した 18・19 号横穴墓は、いずれも道路建設工事に伴う丘陵の掘削中に、天井の一部が崩落したことによって発見されたもので、いずれも前庭部から玄門については開口していな

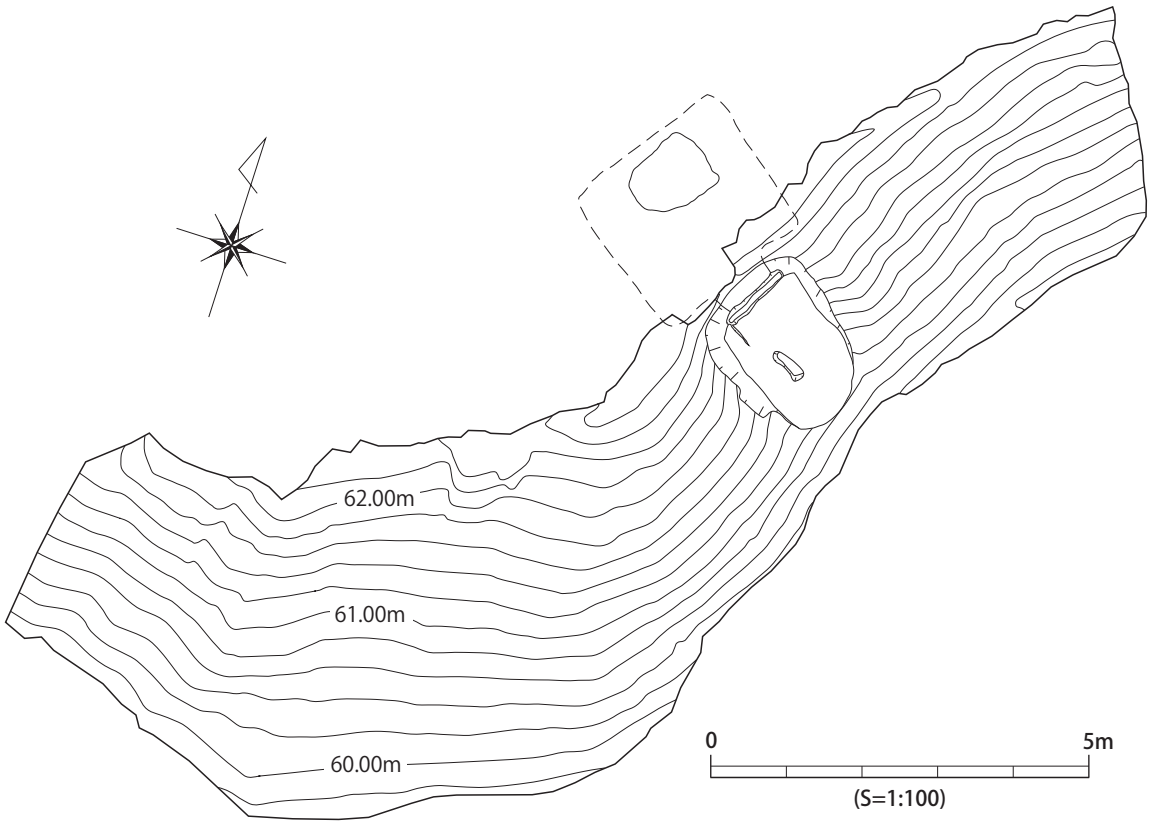
かった。

2. 遺構

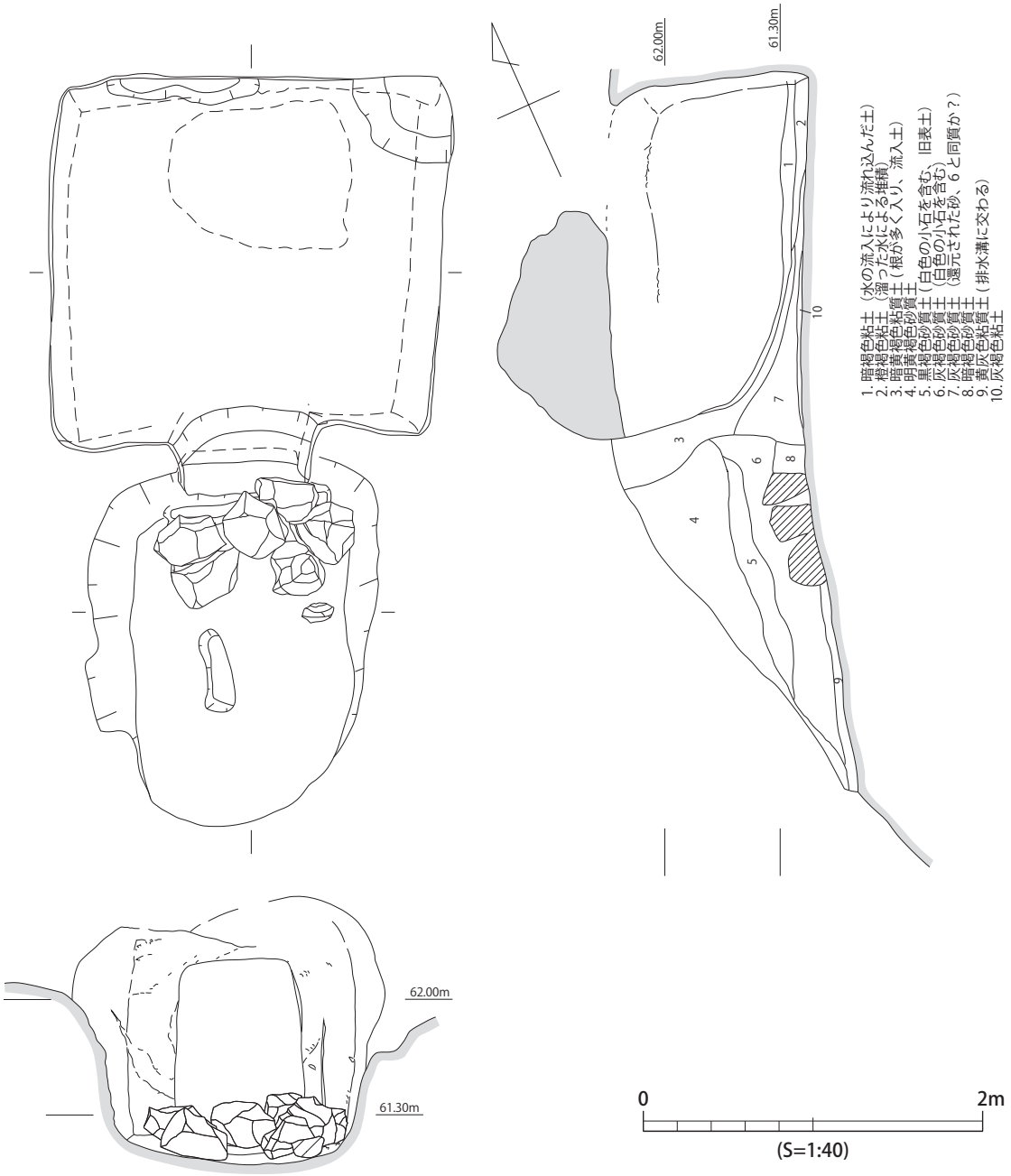
18 号横穴墓　18 号横穴墓は、標高約 62m の南斜面に位置しており、南東方向に開口している。北東に水平距離で約 20m の位置に標高 74 mのピークがある。そのピークの東側、標高 70m 付近には 11 号横穴墓があり、18 号横穴墓とは比高差は約 8m である。18 号横穴墓の調査を実施した時点では、周辺に他の横穴墓は見られなかった。18 号横穴墓は完全に埋没しており、調査前の地表面には、くぼみは見えなかった。

わずかに堆積した周辺の表土を除去すると、すぐに凝灰岩の岩盤が現れ、18 号横穴墓の前庭部が浮かび上がった。前庭部センターにセクションベルトを残し、土層断面を観察しながら掘削した。それによると、前庭部 6・8 層と玄門付近の 7 層の間に、まっすぐに立ち上がる土層が見え、この位置に有機質の閉塞板が立っていた様子がうかがわれる。6 灰褐色砂質土の上に旧表土と考えられる 5 黒褐色砂質土が見られることから、初葬時の埋め戻しが、6 灰褐色砂質土までだったと思われる。4 明褐色砂質土で埋没した後に、雨水の影響か、玄門上部が開口していたと思われ、その後に 3 暗黄褐色粘質土が入り込み、玄門を完全に塞いだ状態となった。玄室内には、雨水の流入による粘土が薄く堆積している。

前庭部は幅約 1.3m、長さ約 1.9m を測り、やや幅が狭い。前庭部中央に長さ 50cm、幅 15cm、深さ 4cm 程のくぼみが見られるが、岩盤中の石が抜け落ちた跡と思われる。排水溝は見えない。閉塞部には長さ 30cm 程の角礫 8 点が見られ、木製の閉塞板を押さえていたと考えられる。閉塞



第 4 図　18 号横穴墓付近地形測量図（1:100）



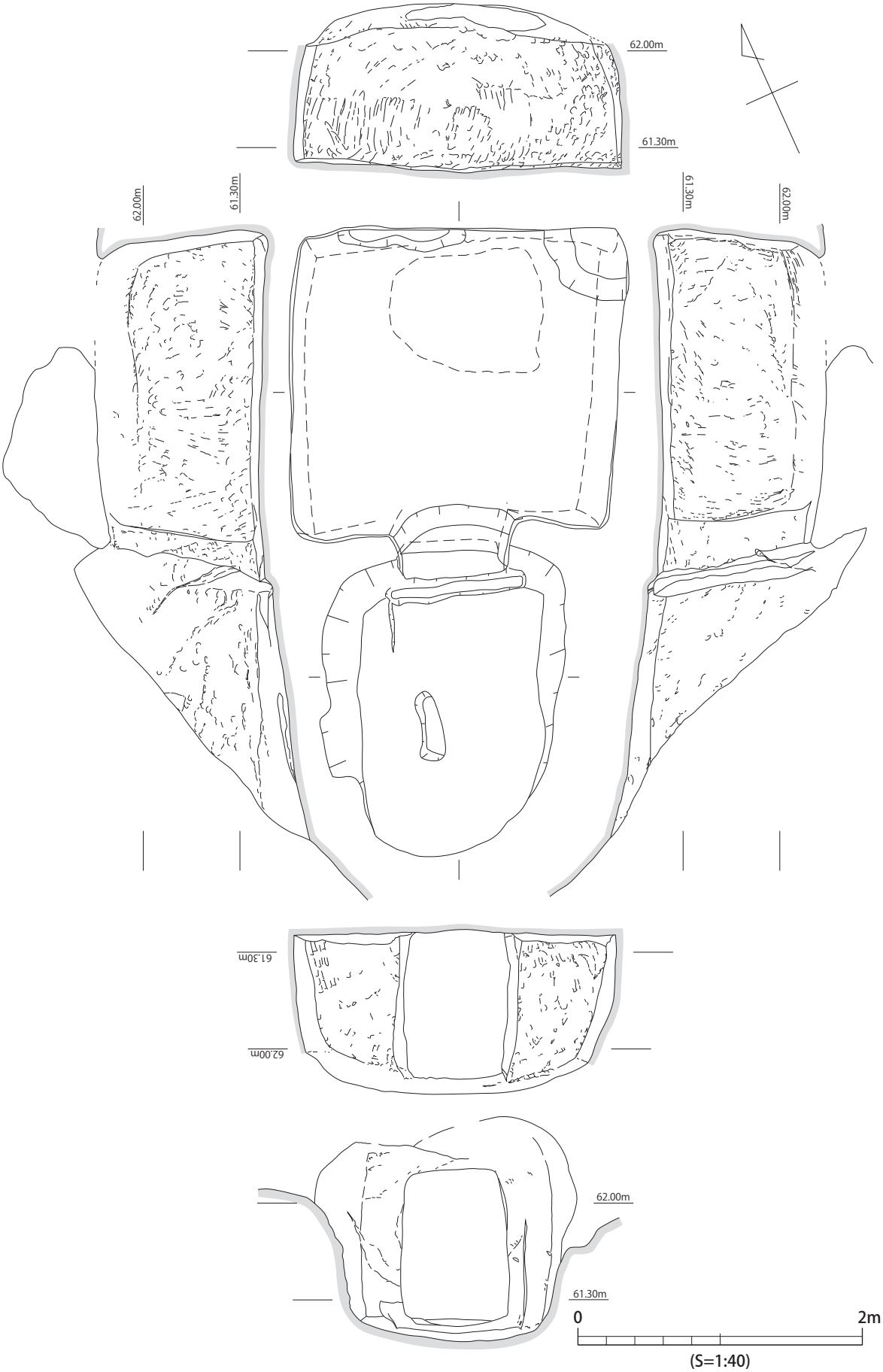
第 5 図　18 号横穴墓土層断面図（1:40）

部の床面には幅 95cm、奥行き 12cm、深さ 5cm の溝が切られており、閉塞板の基部となる。前庭部側の立面には、右側下方のみに閉塞板が収まる段が見える。

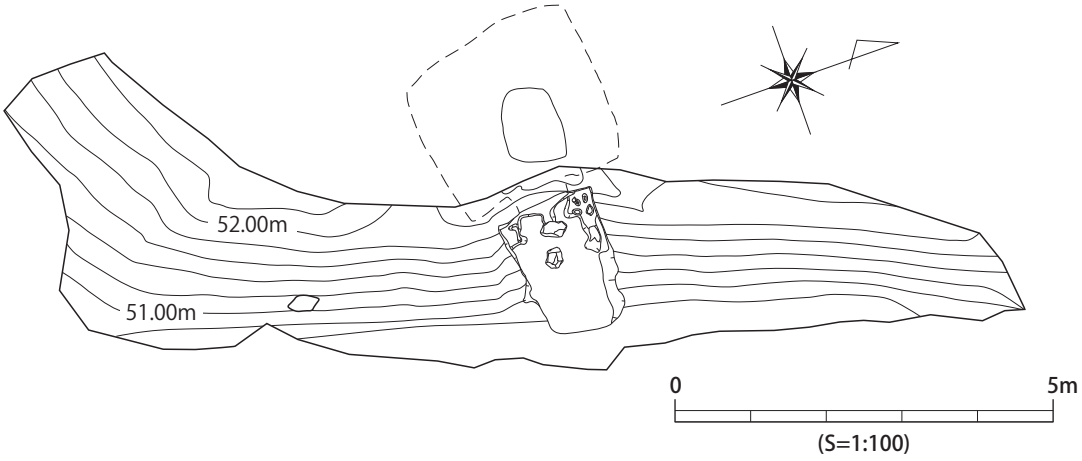
玄門は高さ 98cm、基底部幅 76cm、天井部で 64cm、奥行き 38cm を測り、立面形はほぼ長方形である。各面は丁寧に整形されている。

玄室は、奥行き 2.3m、幅 2.3m を測り、ほぼ正方形。天井までの高さは 1.1m である。床面はほぼ水平で、排水溝は見られないが、奥壁沿いから右奥の隅にくぼみが残る。4 方の壁は丁寧に整形され、各壁の界線は明瞭である。また、不明瞭ながら軒線を引き、天井はドーム天井に近い。天井の奥側に、工事によって崩落した穴が開いている。

各面は非常に丁寧に整形されており、幅約 4 ～ 6cm 程の刃部が僅かに湾曲した工具痕が多く残される一方、壁面の界線近くには、幅 2cm 程の先の尖った工具痕が見られる。荒掘り時には 2 種



第６図　18 号横穴墓実測図（1:40）



第７図　19 号横穴墓付近地形測量図（1:100）

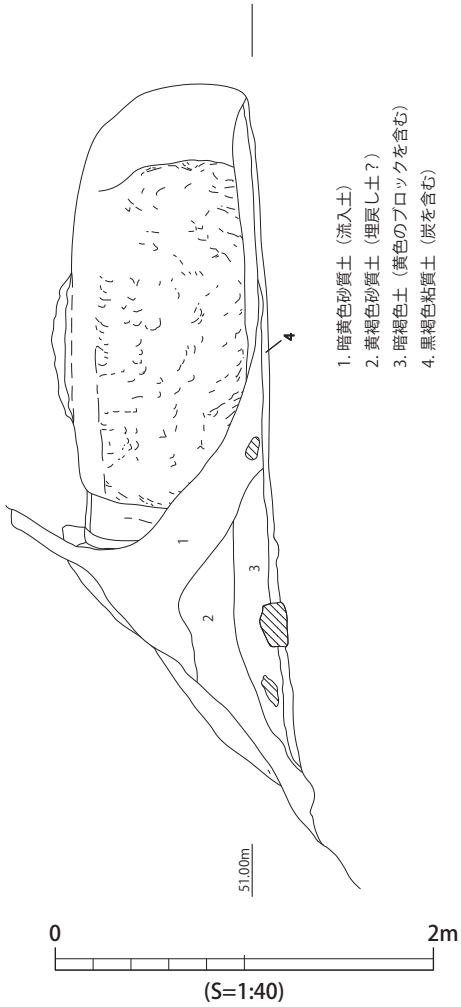
類の工具を併用し、幅約４～ 6cm のわずかに刃部が湾曲した工具を斜め方向に使って整形しているか。大西大師山遺跡の他の横穴墓では、幅約 6cm の刃部の丸い工具で荒掘りを行っていることが知られており、同様の工具であろう。工具痕は、特に奥壁で明瞭に残り、床面から 40 ～ 50cm 程の高さを境に、それより下方ではタテ方向の、上では斜め方向の痕跡が目立つ。床面近くや、壁毎の界線近くでは、界線に向けて斜め方向の工具痕があり、界線を整えようとした痕跡がうかがわれる。

18 号横穴墓は玄室内の埋土をフルイにかけるなど、微小遺物の発見に努めたが、遺物は確認できなかった。

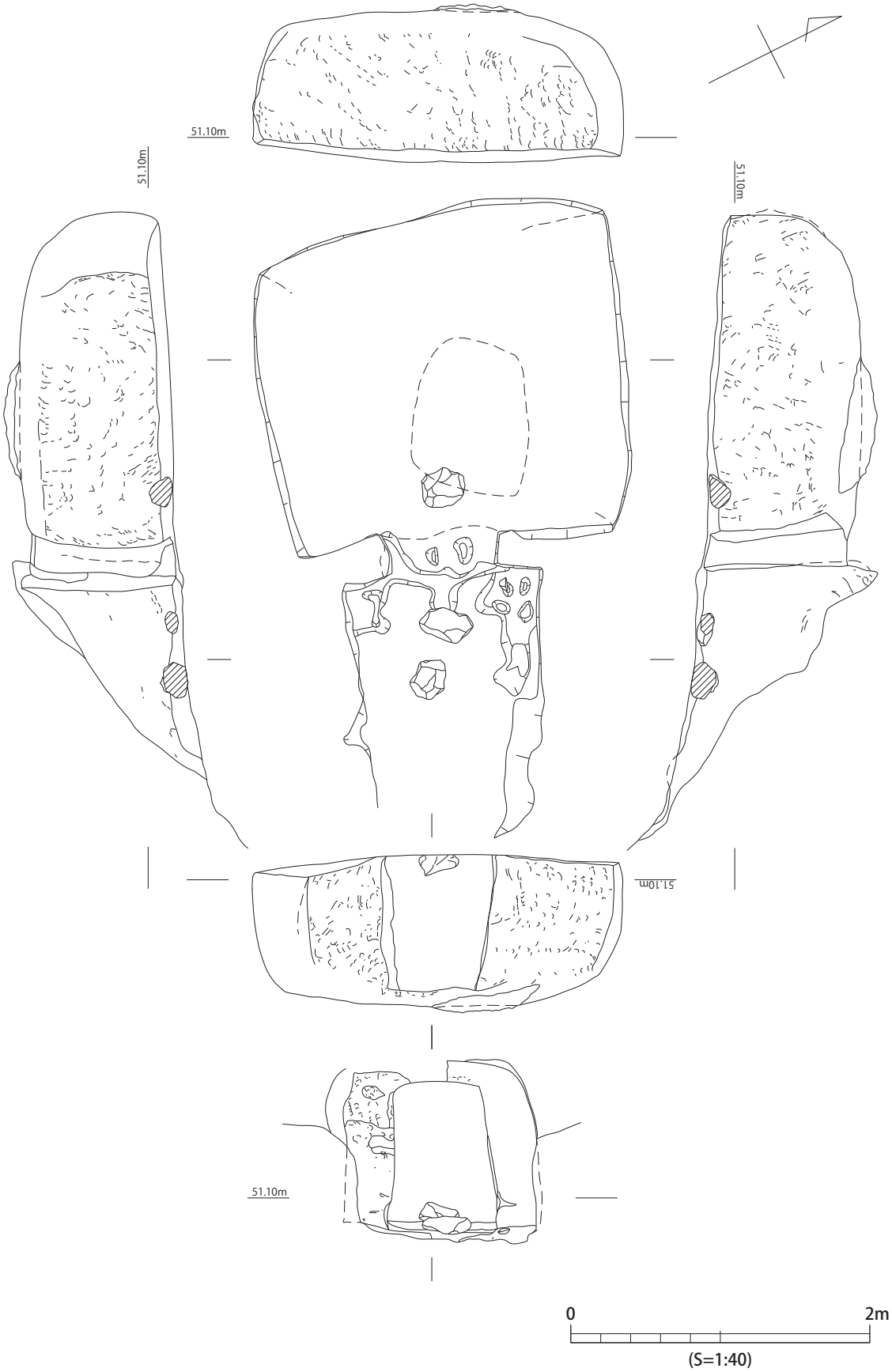
19 号横穴墓　19 号横穴墓は、標高約 51m の南向き斜面に位置している。約 10m 上方に 18 号横穴墓があり、東側の工事影響範囲の外側にはくぼみが見え、さらに２基程度の横穴墓が存在する可能性がある。この周辺には、凝灰岩が露出した部分が広がっており、18 号横穴墓なども含め、４～５基程度が集中している可能性がある。19 号横穴墓は、玄門上部が僅かに開いている程度で、ほぼ完全に埋没しており、調査前の地表面にくぼみを観察することはできなかった。

土層断面では、床面直上に玄室奥から前庭にかけて黒色の粘土が堆積しており、その上層に暗黄褐色土が玄門部より外側に見える。この土が閉塞後の埋め戻し土と思われ、それを埋める黄褐色砂質土の下面近くから須恵器片２点が出土した。

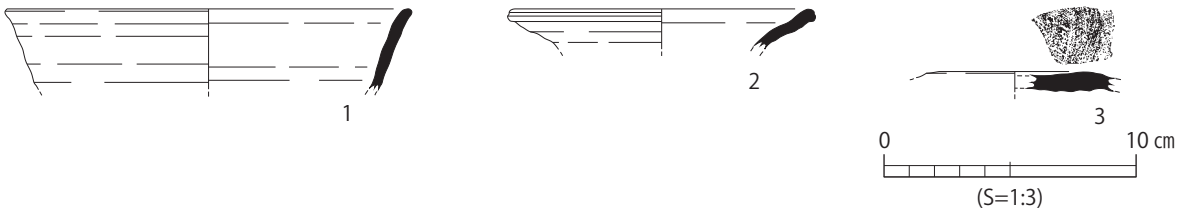
前庭部は長さ 1.8 m で、幅は、閉塞部直前で 1.3m、前庭部先端で 0.8m を測り、前方がわずかにすぼまる形状となっている。閉塞部近くを除き、明確な排水溝は見えない。前庭部の中程に人頭大の石２点があり、また、同様の石１点が玄室内の玄門近くに見られる。いずれ



第８図　19 号横穴墓土層断面図（1:40）



第９図　19 号横穴墓実測図（1:40）



第 10 図　19 号横穴墓出土遺物実測図（1:40）

も閉塞板を押さえていた石と見られ、玄室内の石は、積まれていた石が、内側に転落したものか。玄門部外側の床面には閉塞板を立てたと見られる幅 6cm の浅いくぼみがあるが、左右の際は不明瞭である。閉塞板を立てた溝の中央からは、幅約 16cm の排水溝と見られる浅い溝が延びているが、20cm 程の位置で消滅している。

玄門は幅約 9.7m、高さ約 0.85m である。各面は非常に丁寧に整形されている。

玄室は、奥行き 2.1m、幅 2.4m を測り、長方形に近いが、奥壁が屈曲し左側壁の中程でわずかに折れ曲がる。天井までの高さは 1m である。床面はほぼ水平で、排水溝は見られない。4 方の壁は丁寧に整形され、各壁の界線は明瞭である。天井は緩いドーム形で平天井に近いが、各壁の界線から上へ向けてわずかに稜線が続き、家形の天井を意識した下り棟の表現がわずかに見える。

各壁面の工具痕は、18 号横穴墓ほど明瞭ではなく、より丁寧に整形されているように見える。幅約 4 ～ 6cm 程の刃部先端が僅かに湾曲した工具痕は、他の横穴墓と共通した工具と思われる。斜め方向に延びる整形時の工具痕が目立ち、各壁間の界線や軒線にかかる部分はそれぞれの線に直行する工具痕が残される。18 号横穴墓の界線近くに見られた先の細い工具痕は、ほとんど見えない。

3．19 号横穴墓出土遺物

19 号横穴墓からは須恵器の小片が出土した。玄室内の堆積土については、湿気が多く、フルイを通らなかったため、掘り上げた後の土を再度細かく潰すなどして小さな遺物の発見に努めたが、金属器や玉類は出土しなかった。

19 号横穴墓前庭部及び玄室内部から出土した遺物は 4 点で、いずれも焼成良好な須恵器の小片であった。このうち、10-1・2 の 2 点は前庭部、10-3 は玄室内部から出土した。また、玄室内部に落ちた閉塞石の下から坏蓋と思われる破片が出土したが、小片のため図化できなかった。

10-1 は坏の口縁端部片で、直線的に外傾し、端部はわずかに外反する形状である。復元口径 15.8cm となることから、高坏の坏部の可能性も考えられる。10-2 は甕か甑の口縁部片で、復元口径 11.6cm を測る。端部は丸みを帯びる形状で、外面に沈線状の稜線が入る。10-3 は坏蓋の天井部片で、外面には板状圧痕の後、ヘラ削り調整を施した痕跡が残る。石見 3 ～ 4 期と思われるが、小片のため断定できない。

4．小結

今回の調査では、凝灰岩の岩盤に掘られた横穴墓 2 基の調査を実施した。今回の調査により、大西大師山遺跡では、前庭部の掘削のみで放棄された 1 基を含む（註 4）、19 基の横穴墓を調査したことになる。

18・19 号横穴墓は、尾根のピークから大きく下がった位置に造られている。18 号横穴墓から

は遺物はなく、19 号横穴墓の須恵器も石見３～４期の可能性があるが、小片のため断定しがたい。大西大師山遺跡の横穴墓の多くは、玄室の平面形が不定形で、各壁面の整形が荒いものが多いが、18・19 号横穴墓は、比較的丁寧に整形され、また、いずれも幅の狭い前庭部を持っているなど共通する特徴もあり、この支群の特徴と言える。

〈註〉

(1) 『大西大師山遺跡』 島根県教育委員会　2017 年

(2) 『諸友大師山横穴群』大田市教育委員会　1983 年

(3) 『大田市松田谷横穴群』大田市教育委員会　1982 年

(4) 平成 26 年度に調査を行った９号横穴墓は、前庭部と見られる掘削があるが、玄門より奥を掘られておらず、遺物や工具痕も残していない。調査時には横穴墓とするかどうか疑問視する声もあったが、７～10 号横穴墓の一連で造られた支群中にあることから、横穴墓と判断された。註１文献。

第４章　城ヶ谷遺跡（２区）の発掘調査

1. 遺跡の概要

城ヶ谷遺跡は、大田市久手町刺鹿の標高約 45m の丘陵尾根上から西斜面にかけて位置している。遺跡の北側には旧波根湖が広がり、南側に迫る丘陵上には中世の山城である岩山城跡が位置する。西側には小さな尾根 1 本を挟んで、江谷川が北流している。江谷川右岸には古代の遺物が多く出土した荒槇遺跡が、さらに西から流れてくる支流市井川周辺には縄文から古代の遺物が出土している門遺跡、中尾 H 遺跡などが知られる。城ヶ谷遺跡の東隣の尾根上には、葺き石を持つ小規模な古墳 2 基以上がある涼見 E 遺跡がある。

城ヶ谷遺跡では、平成 26 年度に西斜面部分 (1 区) について発掘調査を実施し、近代の陶器・瓦を生産した連房式登窯を含む工房跡と、古墳時代後期の集落跡を検出した。近代の遺構は、明治期に陶器を生産した連房式登窯で、その後改造され、昭和期には瓦を生産している。連房式登窯の周囲からは、作業用と考えられる礎石建物跡や物原を検出し、多量の陶器・瓦類のほか、窯道具を採取した。また、調査区の南北には成形に必要な水を供給したと思われる溜池があり、北側の窪地には工房跡の一部が残されている。一方、古墳時代後期の集落跡は、陶器・瓦工房跡の上方、標高約 35m 付近で、竪穴建物跡３棟を検出している。３棟は一連の平坦面上で、横に連続するように見られ、いずれも山側に造付け竈を備えている。これらのうち 2 棟から土器類が出土しており、土器類の年代より７世紀後半代の集落跡と考えられている。遺跡下方の遺物包含層からも古墳時代の須恵器・土師器が出土していることから、城ヶ谷遺跡の西向き斜面には、古墳時代後期の集落が広く展開していたものの、近代の陶器・瓦工房により破壊された様子がうかがわれる。

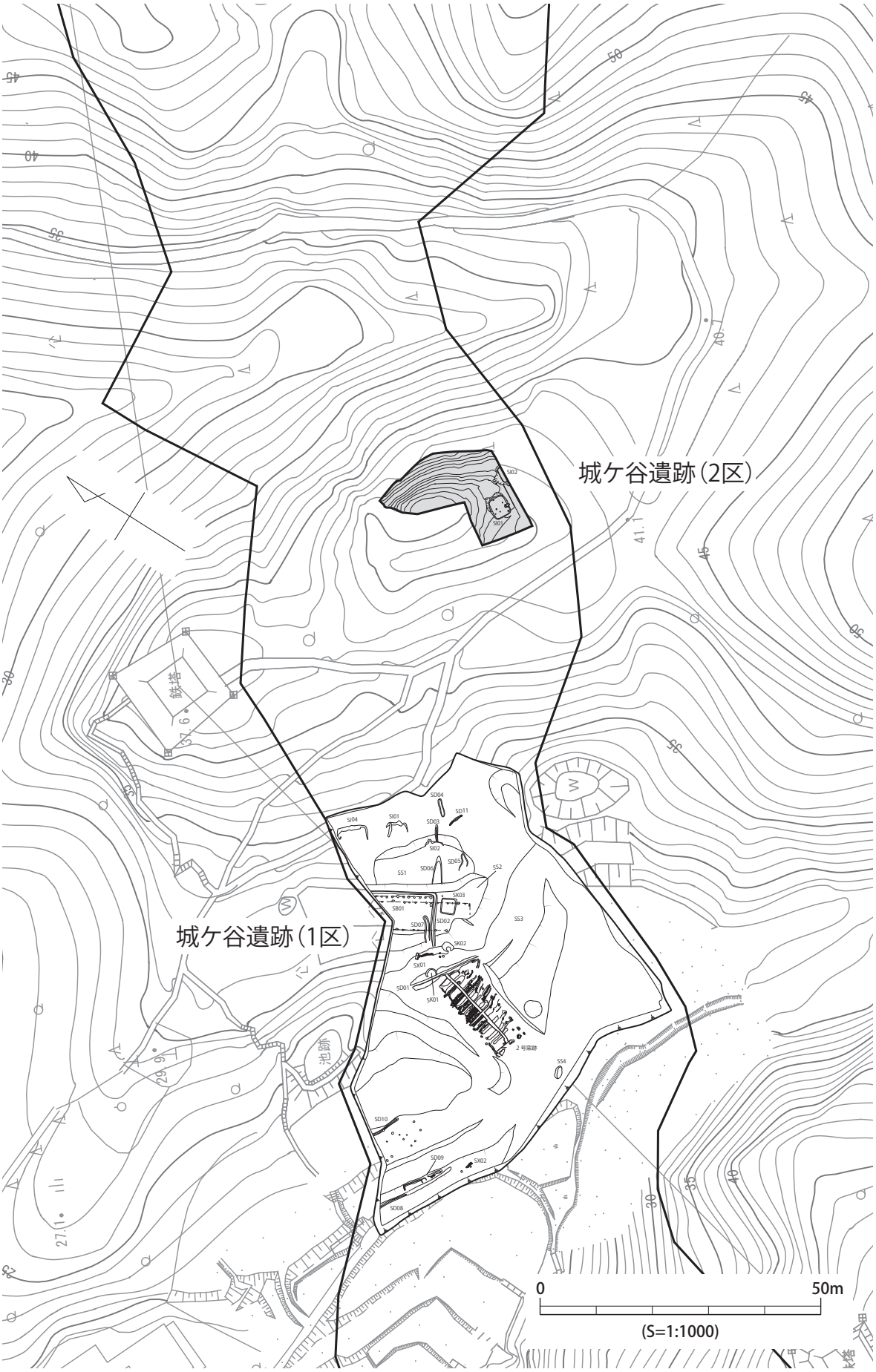
城ヶ谷遺跡の尾根部分については、用地取得や保安林解除の都合から調査が行われていなかったが、平成 28 年 6 月に保安林内の作業許可が取得でき、試掘調査を実施した。その結果、丘陵の最高所から北側には遺構・遺物は見られなかったが、尾根筋の南寄りに移動式竈の破片を含む落ち込みが見られ、古墳時代後期の集落跡が存在した可能性が高まった。このため、尾根上の南半部から東斜面を含んだ、L 字形の調査区を設定することとなり、同年 12 月から現地調査に着手した。

調査前の城ヶ谷遺跡 (2 区) 付近は檜の植林地となっており、尾根上は緩やかな平坦面だったが、東向きの斜面は急斜面となっていた。

2. 遺構・遺物

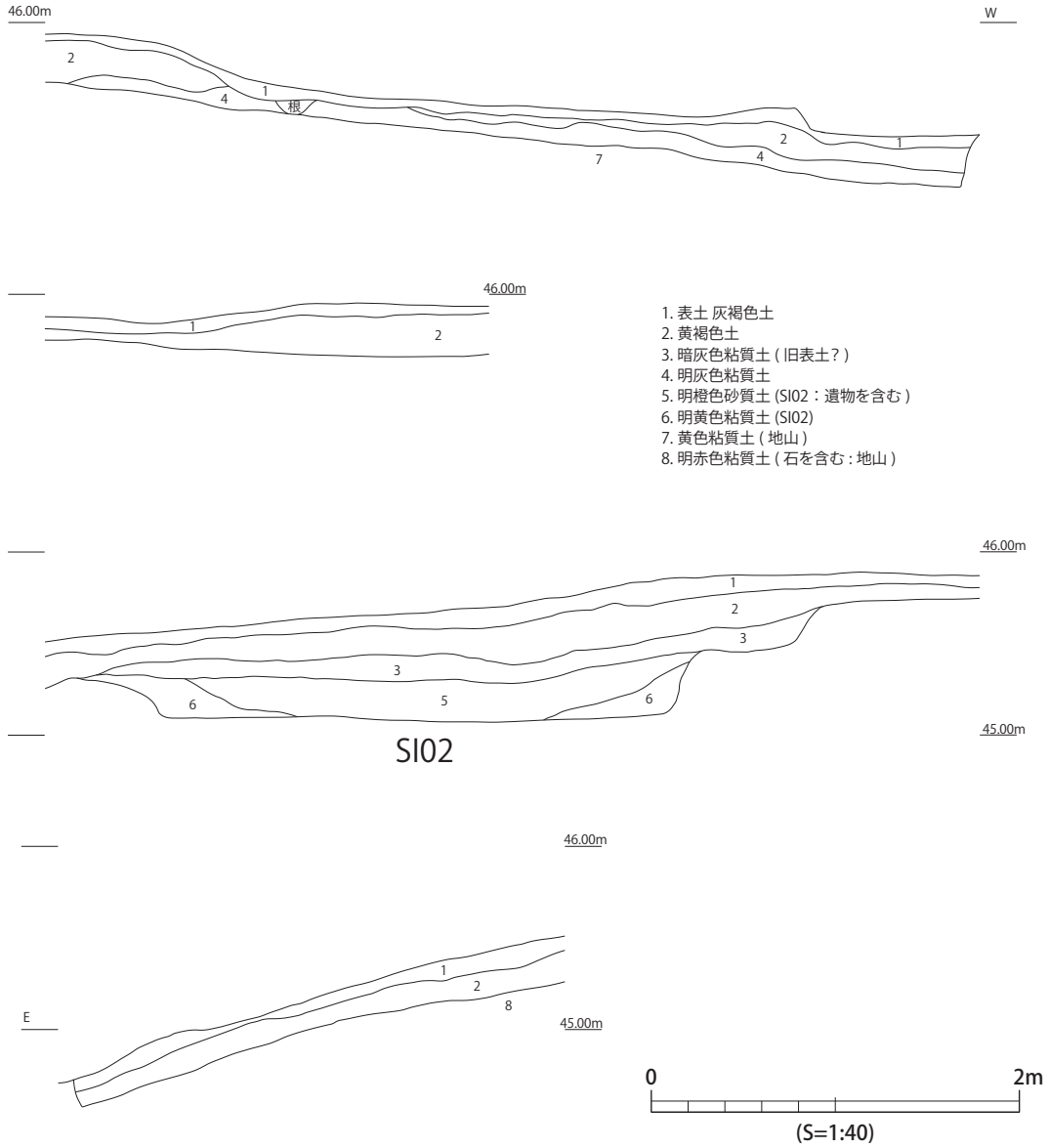
城ヶ谷遺跡 (2 区) の調査では、尾根上の標高 46m 付近から南側の用地際にかかる位置にかけて、竪穴建物跡 2 棟を検出した。2 棟の竪穴建物跡は、発見順に SI01・02 と呼んだ。この他に、SI02 に隣接してピット 1 基を検出している。また、竪穴建物跡の内部や周辺の遺物包含層から黒曜石片・石製品、弥生土器、須恵器・土師器が出土している。

調査区南壁の土層断面 (第 13 図) では、薄い表土直下に黄褐色土の堆積が見られ、この土に少量の遺物を含んでいる。東斜面では、中程で SI02 の断面が見えており、SI02 の上層に旧表土と見られる暗灰色粘質土が堆積している。この土層は、SI02 の廃絶後にくぼみが残っていたことを示すと思われ、その後の堆積が造成土であった可能性を示している。表土掘削後に、東斜面に設定した B-B' 断面 (第 24 図) では、はっきりと造成土 (1 赤褐色粘質土) が観察され、植林に際して尾根



第 11 図　城ヶ谷遺跡調査区配置図（1:1,000）

第 12 図　城ヶ谷遺跡 (2 区) 遺構配置図（1:200）



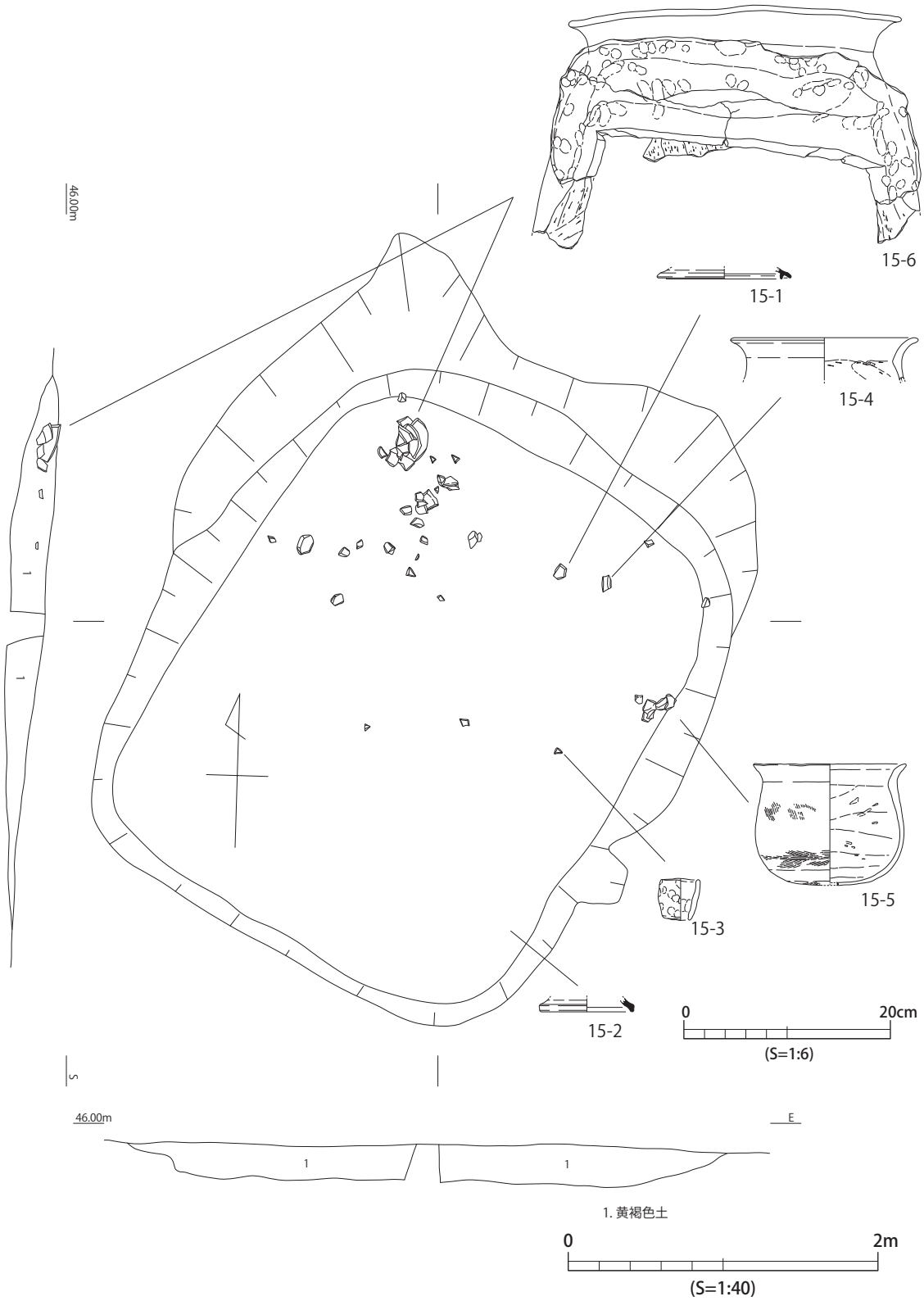
第 13 図　城ヶ谷遺跡（2 区）南壁土層断面図（1:40）

頂部を削り、その土を東斜面に押し流していたと考えられる。試掘調査でも、標高 46m より高い位置の、なだらかな尾根上には遺構の残存はなく、遺物も見られなかった。一方、東斜面の造成土中からは、少量の遺物が出土している。

SI01 上層　SI01 は、標高約 46m の尾根頂部南寄りの位置で検出した竪穴建物跡である。試掘調査時にトレンチにかかった遺構で、下層は、隅丸方形の竪穴建物跡だった。その上層に、遺物を含んだ黄褐色土が堆積する窪地を検出している。窪地の平面形は不定形で、壁がはっきりしなかったため、第 14 図では下層のプラン上に遺物出土状況を配置している。遺物は、窪地の北側に集中して見られ、土師器甕と移動式竈が見らる。遺物を取り上げ、黄褐色土を掘削すると、南北 3.5 m、東西 3.8 m、深さ 25cm の窪地が現れ、SI01 下層とはっきり分離できたことから、SI01 下層にあった竪穴建物の廃絶後に、残された窪地に土器が転落したものと判断される。

SI01 上層出土遺物　第 15 図には SI01 上層から出土した須恵器・土師器と、SI01 下層の竪穴建物跡に伴わないと考えられる須恵器を図示した。

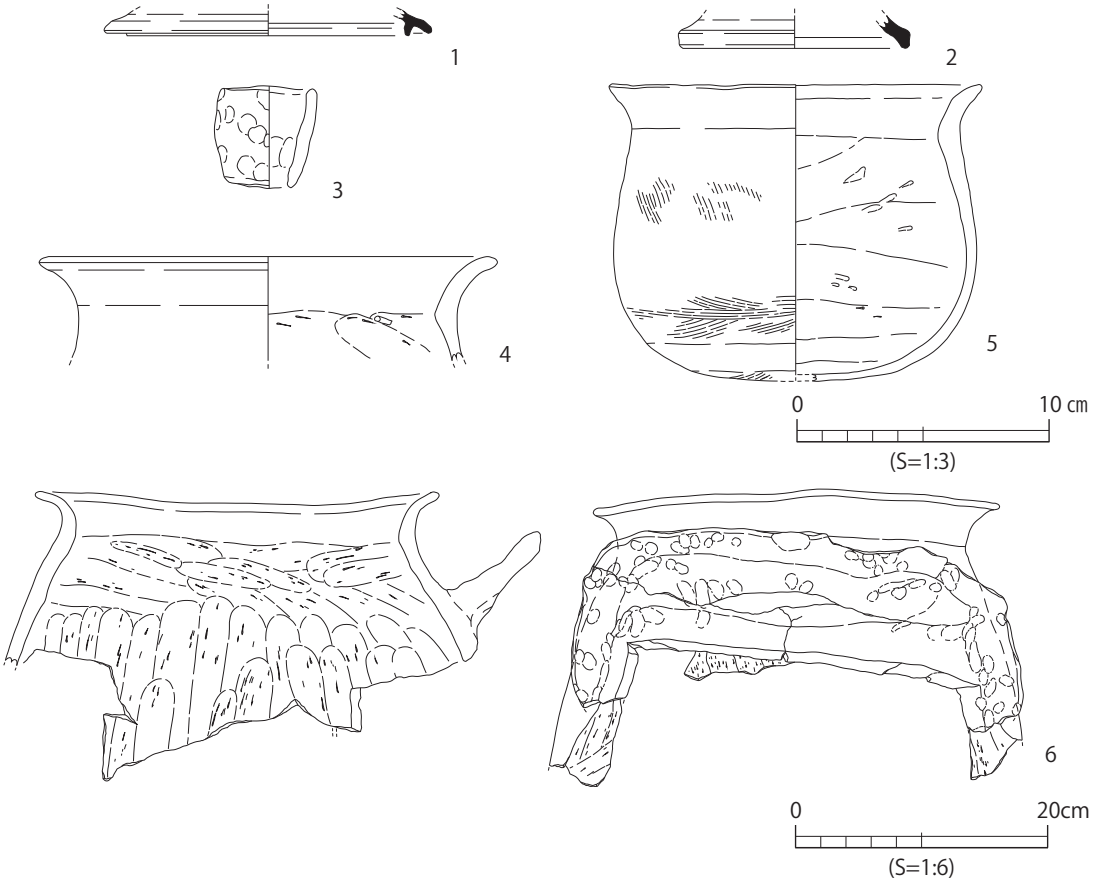
15-1・2 は須恵器である。15-1 はカエリの付く坏蓋で、口縁端部の小片である。口径 13.0cm



第 14 図　SI01 上層遺物出土状況・土層断面図（1:40、遺物は 1:6）

を測り、天井部にはつまみが付いていたと思われる。15-2 は高坏の脚端部の小片で、底径 8.8cm と小さいものである。端部は接地面が少なく、外面に面を持つ。15-1・2 はいずれも回転ナデで調整されている。15-2 は、壁際に近い下層からの出土だが、口縁部の小片で、SI01 内に接合資料が全く見られないことから混入と判断した。

15-3 ～ 6 は土師器である。15-3 は、口径 3.7cm、底径 2.5m、器高 4.1cm を測る小型の土器で、



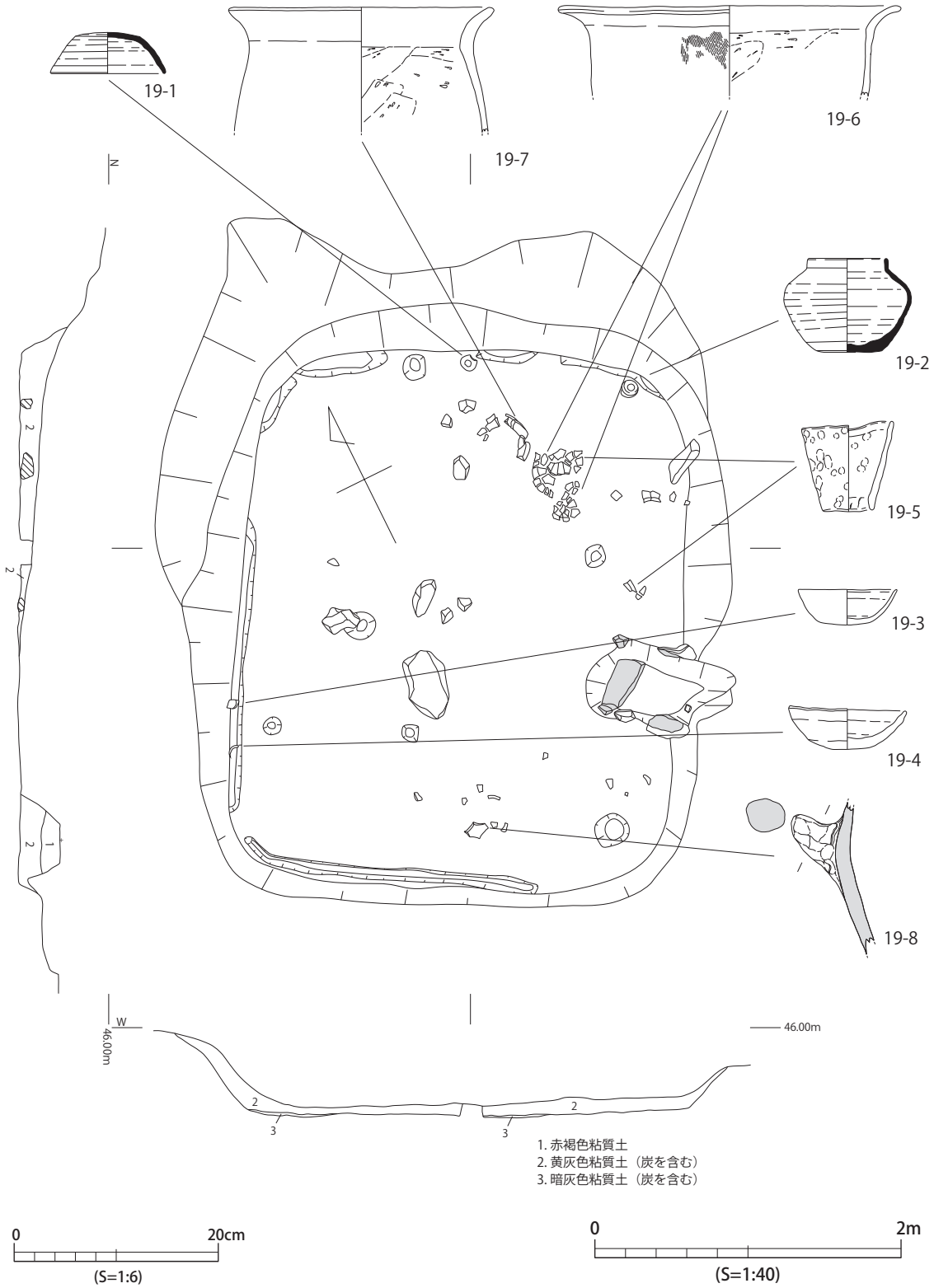
第 15 図　SI01 上層出土遺物実測図（1:3、6 は 1:6）

ほぼ完形品である。上下の端部が存在し、底面が無い状態で筒形を呈する。全面に指頭圧痕が残ることから、手づくね成形されていると思われ、胴部はわずかに膨らみを保つ形状である。15-3 は、小型であることと、甑の形状に似ていることなどから、ミニチュア製品の可能性が高いと考えている。また、後述する 19-5・22-2 も同様の形状を呈している。15-4 は甕の口縁部～肩部の破片で、口径 17.4cm を測る。口縁部は沿って外反し、端部はわずかに下垂気味の形状で、肩部以下は張らずに下りる。外面は無文だが、内面はヘラ削り調整が施される。15-5 は口径 14.6cm、胴部最大径 14.4cm、器高 11.8cm を測る小型の甕である。口縁部は緩やかに外反し、胴部は張らずに下り、底部にかけて張り出す形状である。口縁部は肥厚するが、底部にかけて薄手となり、平底状を呈する。外面肩部には斜め方向、底部付近でヨコ方向、底部で斜め方向のハケ目が部分的に見られ、内面はヘラ削り調整が施される。また、口縁部と胴部外面にススが付着している。15-6 は移動式竈である。口縁部～胴部はほぼ残存しているが、基部は一切残っていない。口径は 31.5cm、胴部は残存している部分で 37.0cm を測る。口縁部は大きく外反するが、下垂せず水平を保つ形状である。庇は約 9.0cm と長く、上方に反り気味に接着されており、貼り付け時の指の痕跡が数多く見られる。胴部外面は風化が著しいが、ハケ目などは見られない。内面は、上方がヨコ・斜め方向、下方がタテ方向の幅広のヘラ削りが施される。

SI01　SI01 下層は南北 3.9m、東西 3.4m の隅丸方形を呈する竪穴建物跡で、わずかに長辺となる南壁の中央よりやや西側に造付け竈を備えている。床面直上に 3 暗灰色粘質土が部分的に堆積しており、薄い貼り床か。床面全体を覆う 2 暗灰色粘質土には炭が含まれており、SI01 は焼失した可能も想像される。

ほぼ直立する壁面の直下には、部分的に壁体溝と思われるくぼみが残されているが、柱穴は明確でない。床面に小さな柱穴状のくぼみが６基見られるが、これらはいずれも浅く、規則的な配置にもなっていないことから、屋根を支える柱ではなかったと思われる。

SI01 の内部には、拳大から人頭大の石が入り込んでいるほか、須恵器短頸壺や土師器甕などが出土している。

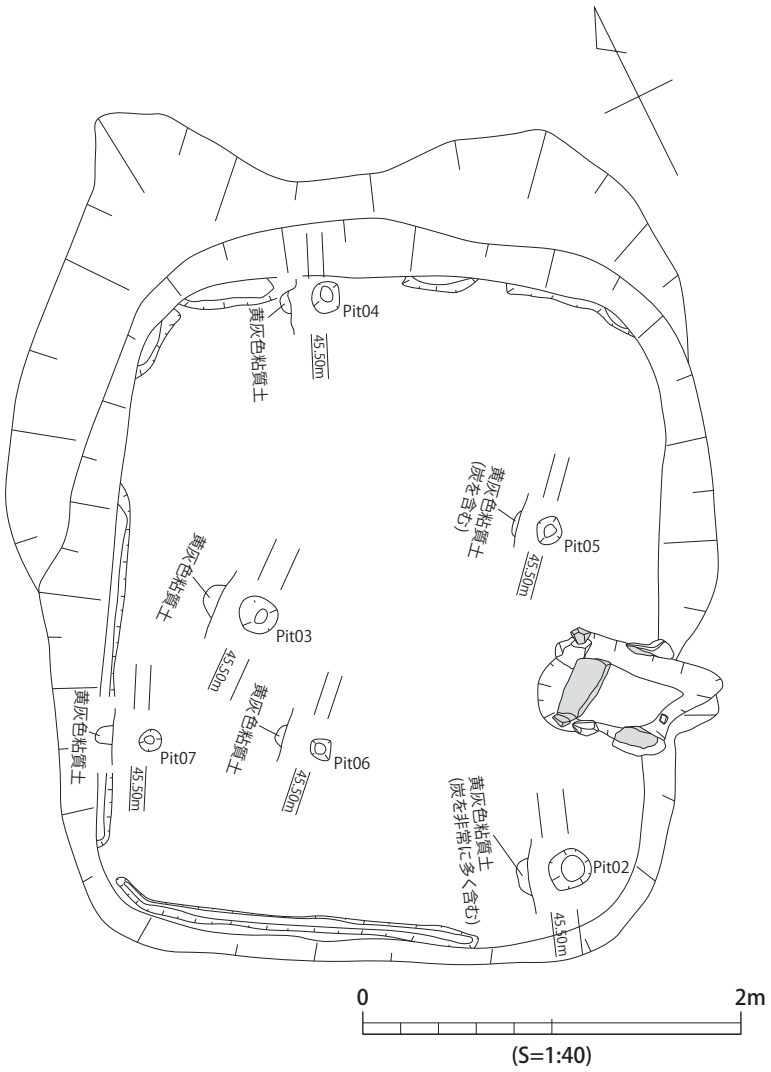


第 16 図　SI01 遺物出土状況・土層断面図（1:40、遺物は 1:6）

造付け竈は、上部が崩落している状態と思われ、石を構築材とした左右の壁と、内部に大きな石が落ち込んだ状態で検出した。幅 54cm、全長 97cm で、床面は、非常によく焼けており、SI01 南壁から外に向かって緩やかに立ち上がり煙道となる。煙道部分は全長 23cm で、溝状になっている。SI01 床面との間に段差はなく、深く掘りくぼめられている様子はない。

左右の壁は、各３個以上の板石が立てられ、石の間を粘土で固めている。石材は全て凝灰岩であった。造付け竈の内面側はよく焼けているが、外面側は凝灰岩の乳白色を残している。北西側の焚き口近くに横たわる大きな石は、まぐさ石が転落したものと思われ、竈の内側を向いた面から上面にかけて、非常によく焼けている。よって、本来は、これらの面が、直接火を受けた下面から内側を向いていたと思われ、転落した際に回転したと思われる。造付け竈に使用された凝灰岩は、大西大師山など近隣で見られる石材である。

SI01 出土遺物　19-1・2 は須恵器で、19-1 は蓋、19-2 は短頸壺である。いずれも完形に近い状態で出土した。19-1 は口径 11.1cm、天井部径 6.4cm、器高 4.1cm を測るもので、天井部から口縁部にかけて直線的に下りる形状である。外内面ともに丁寧な回転ナデ調整が施され、天井部外面には回転ヘラ削り痕が明瞭に残る。このようなハ字状を呈する形状はあまり類例が無く、坏の可能性も考えたが、天井部のわずかな丸みや、口縁端部が若干先細る形状であることから、蓋と判断した。

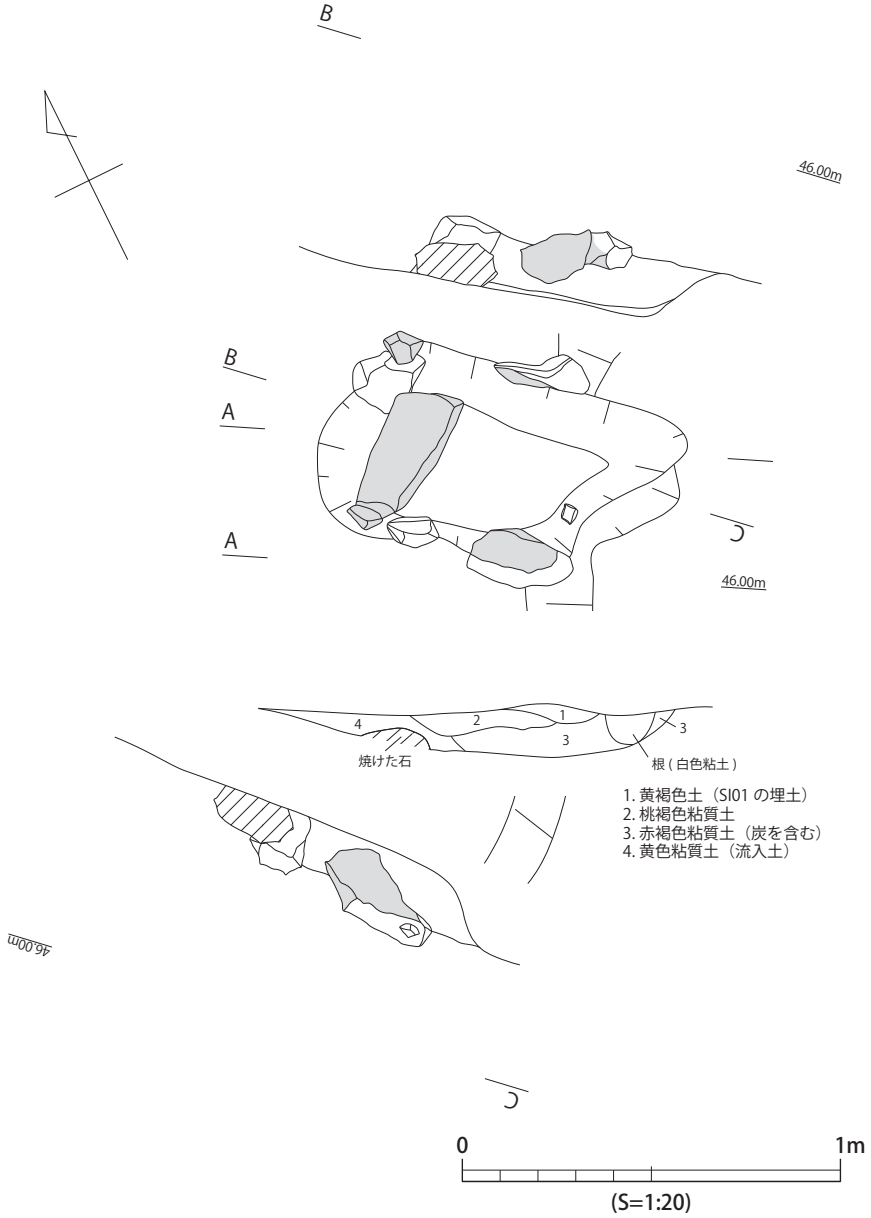


第 17 図　SI01 実測図（1:40）

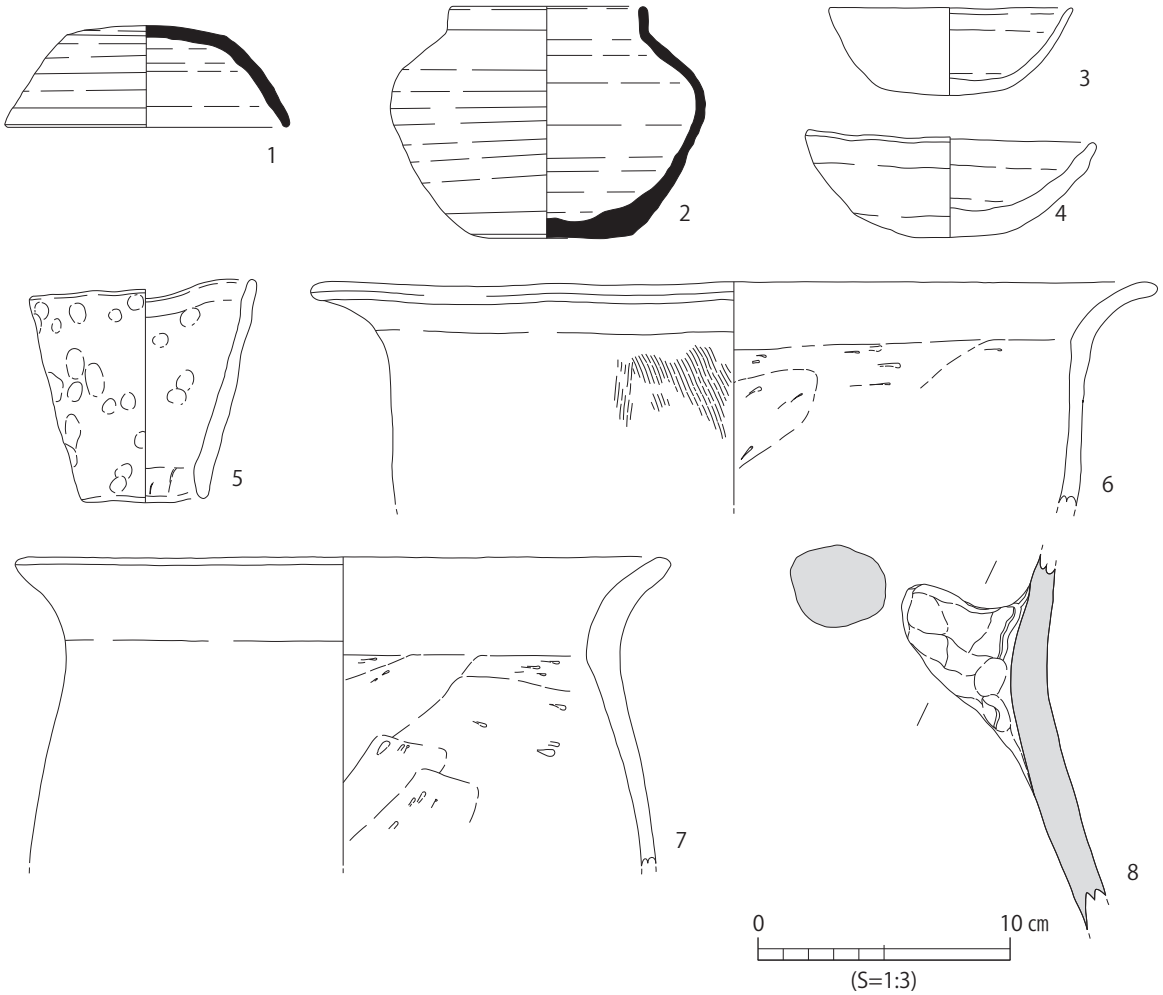
19-2 は口径 7.5cm、胴部最大径 12.5cm、底径 6.5cm、器高 9.3cm を測る短頸壺である。口縁部は垂直に立ち上がり、胴部にかけて丸みを帯びながらやや強めに張り出す。平底の底部を持ち、19-1 と同様に丁寧な回転ナデ・回転ヘラ削り調整が施される。

19-3～8は土師器である。19-3・4は坏で、19-3は薄手で口径9.6cmのやや小型、19-4は厚手で口径11.3cmを測る。どちらも底部は丸みを帯びた平底で、19-4の口縁端部は先細り尖る特徴的な形状である。いずれも劣化・風化が著しく、全体的に脆い状態である。19-5は口

径8.7cm、底径4.7cm、器高8.9cmを測るほぼ完形品で、底面が無く、上下ともに端部が存在する特異な土器である。15-3を大きくしたようなものだが、19-5はより直線的な形状を呈する。口縁部から下方にかけて逆ハ字状に下り、上端部は内面に稜があり、下端部は径を小さくするためにしぼったような痕跡が残る。また、外内面ともに指頭圧痕が多数見られる。15-3に関しては甑のミニチュア製品である可能性が考えられると前述したが、19-5はミニチュアと捉えるには大きく、成形もしっかりしているため、器種や用途は不明である。19-6・7は甕である。19-6は口径32.4cmで、口縁部は大きく外反し、端部がわずかに下垂気味になる。胴部外面には斜め方向のハケ目が残る。また、口縁部内面と胴部外面に斑状にススが付着している。19-7は口径25.0cmで、口縁部は肥厚しやや緩やかに外反する。いずれの胴部も張らずに下り、内面はヘラ削り調整が施される。19-8は把手部分の破片で、器壁が1.5cmと厚手であることから、大型の甑か壺などの把手であったことがうかがえる。把手部分は直径3.3～4.0cm、長さ約5cmを測り、上方に引き伸ばすよう成形されており、また、把手上方部分にススが付着している。



第 18 図　SI01 造付け竈実測図（1:20）



第 19 図　SI01 出土遺物実測図（1:3）

SI02　SI02 は、調査区南壁に接して検出した竪穴建物跡である。南北方向で 1 辺 3m を測る隅丸方形と考えられるが、遺構の大半が調査区外側に延びるため、全形は確認できない。南壁に接して、壁体溝と思われる浅い溝が見られるが、全周しない。南東側の様子が判らないため、竈の有無は不明である。調査した範囲では、柱穴は確認できない。

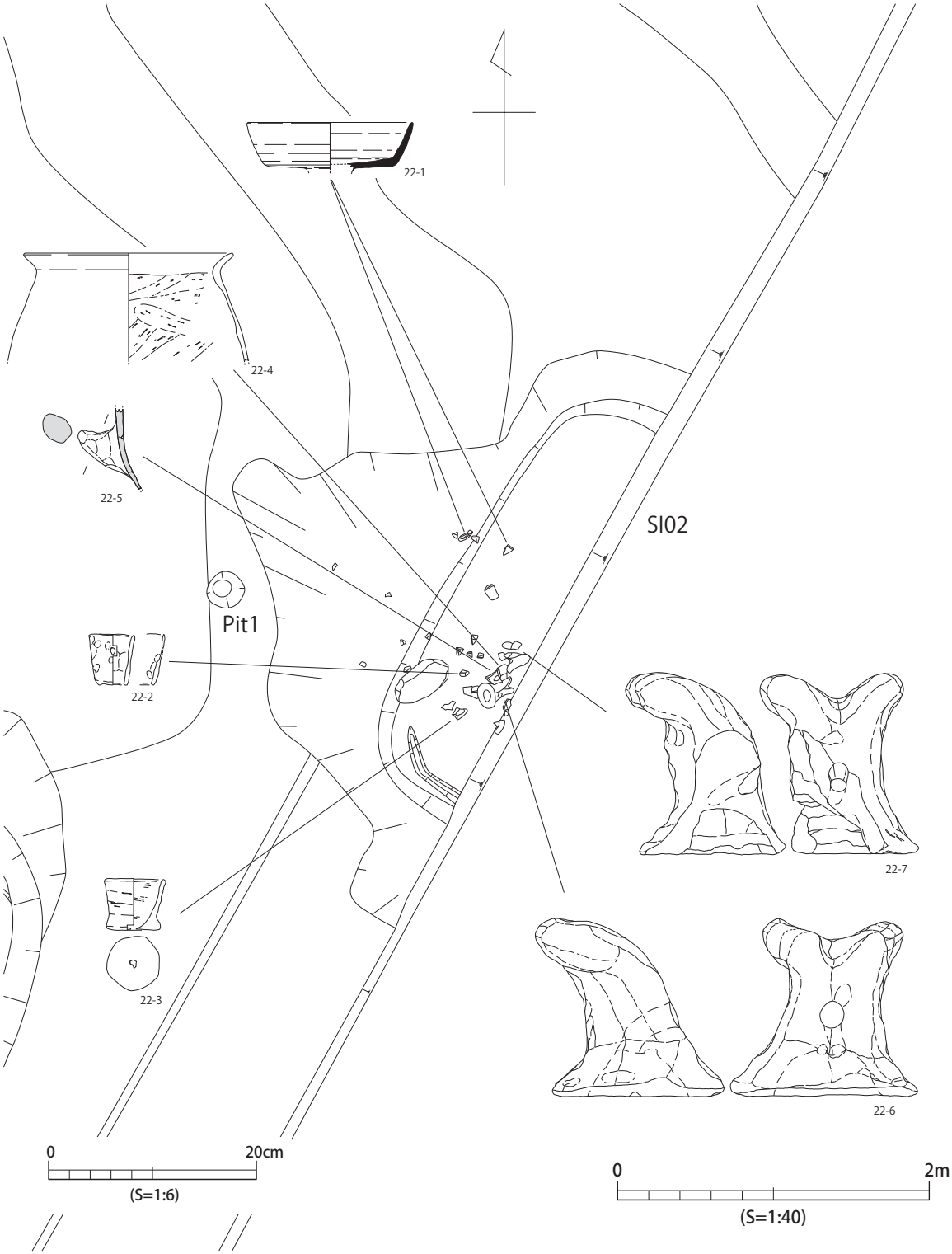
西壁近くには、一抱え程もある石が落ち込んでいる。

SI02 の床面からは、大型の土製支脚、土師器甕などが出土しているが、須恵器 (22-1) は、西壁の上から出土しており、SI02 廃絶後に落ち込んだものである可能性がある。

SI02 出土遺物　22-1 は須恵器の高坏である。坏部の破片で、口径 15.8cm、坏部底径 12.6m を測る。底部は明確に屈曲し、口縁部にかけて逆ハ字状に開き、口縁端部はわずかに先細る形状を呈する。また、底部外面には板状圧痕が残り、その後回転ナデ調整が施される。

22-2 ～ 5 は土師器である。22-2 は口径 4.3 ～ 4.7cm、底径 2.7cm、器高 4.9cm を測る完形品で、上下の端部が存在し、底面が無い状態である。口縁部から下方にかけて筒に近いコップ形を呈する形状で、外内面ともに指頭圧痕が見られる。また、胴部上方に 0.4 ～ 0.6cm の楕円形の孔が開いている。その部分の器壁がかなり薄手になっていることから、手づくね成形時に自然と薄くなり、その後脆くなって開いたものと考えている。22-2 は 15-3・19-5 と類似しており、把手の表現を欠くが、甑の形状であることから、ミニチュア製品の可能性が高いと考えている。22-3 は口

径 5.4cm、底径 5.0cm、器高 5.0cm を測る逆円錐台形を呈する土器である。口縁端部はわずかに肥厚し、底部にかけてコップ形を呈する。底部付近は器壁が最大 1.5cm と分厚くなるが、底面は厚さ 0.1cm と急激に薄手となる特異な形状である。外面は底部付近で屈曲するのに対し、内面はなだらかに丸く下りる。底部中央に 0.6 ～ 0.7cm のいびつな孔が見られるが、器壁が薄いために自然と開いたものと考えている。外面はヘラ削り痕が残るが、全体的に荒く雑な成形である。また、土器の半分が黒く変色しており、一方向からの被熱があったと思われる。15-3・19-5・22-2 は底

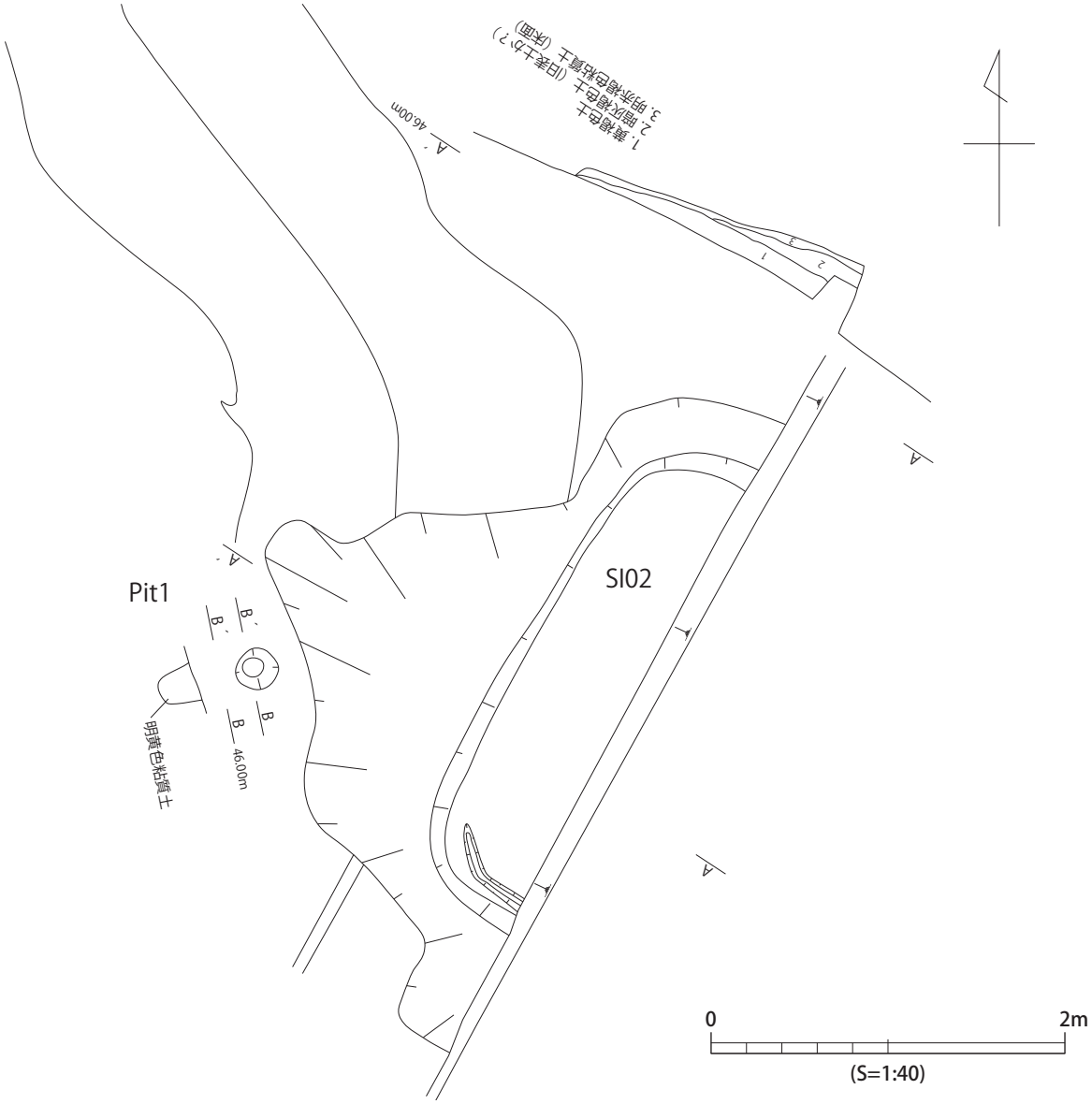


第 20 図　SI02 遺物出土状況（1:40　遺物は 1:6）

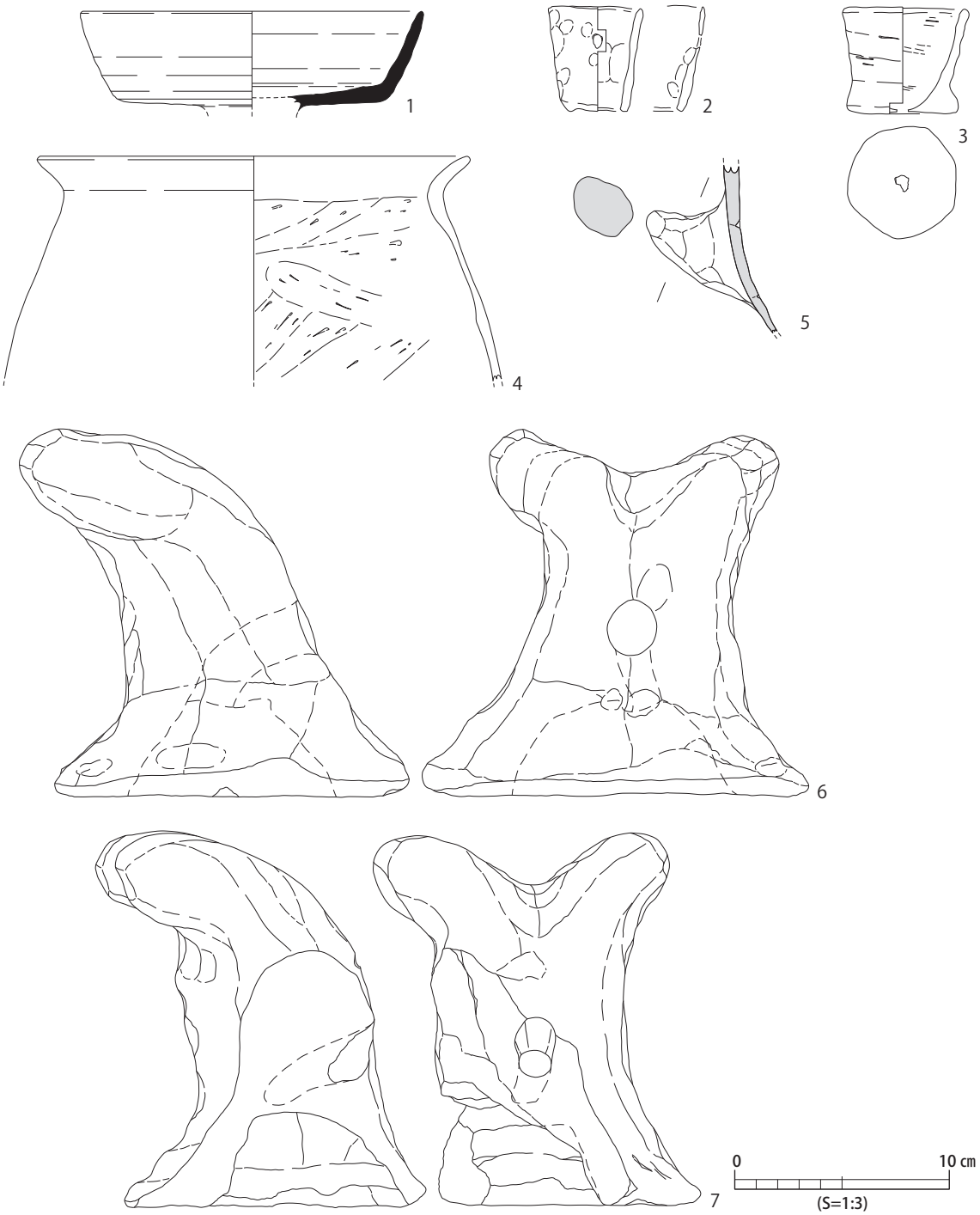
面が無いのに対し、22-3 は底面が付いており、前述した 3 点とは異なる様相である。22-4 は甕である。口縁部〜胴部中程の破片で、口縁部はく字状に屈曲し、胴部はなだらかに下りる。肩部以下は薄手で、外内面ともに風化が著しいが、内面にヘラ削り調整の痕跡が残る。22-5 は把手部分の破片で、おそらく甑と思われる。把手部分の断面は楕円形で、指による成形・調整が施される。また、内面劣化により把手接着時の痕跡が残る。

22-6・7 は土製品で、土製支脚である。22-6 は底径 13.9 〜 15.4cm、器高 17.2cm を測る大型の完形品で、二股の突起が付くタイプである。基部上方に直径 2.3 〜 2.6cm の穿孔があり、基部内の抉りに貫通している。内面の抉りは荒く雑で、指の痕跡が顕著である。外面は比較的滑らかに調整されており、指痕などはあまり見られない。22-7 は底径 13.2cm、器高 17.4cm で、22-6 とほぼ同様の形態である。基部内の抉りの雑さや外面調整の丁寧さは類似しているが、穿孔と抉りは貫通していない。

その他の遺構・遺物　SI02 に隣接してピット 1 基 (第 21 図) を確認しているが、遺物は無く、時期・性格は不明である。城ヶ谷遺跡 (2 区) の調査では、他に明確な遺構は確認できなかった。



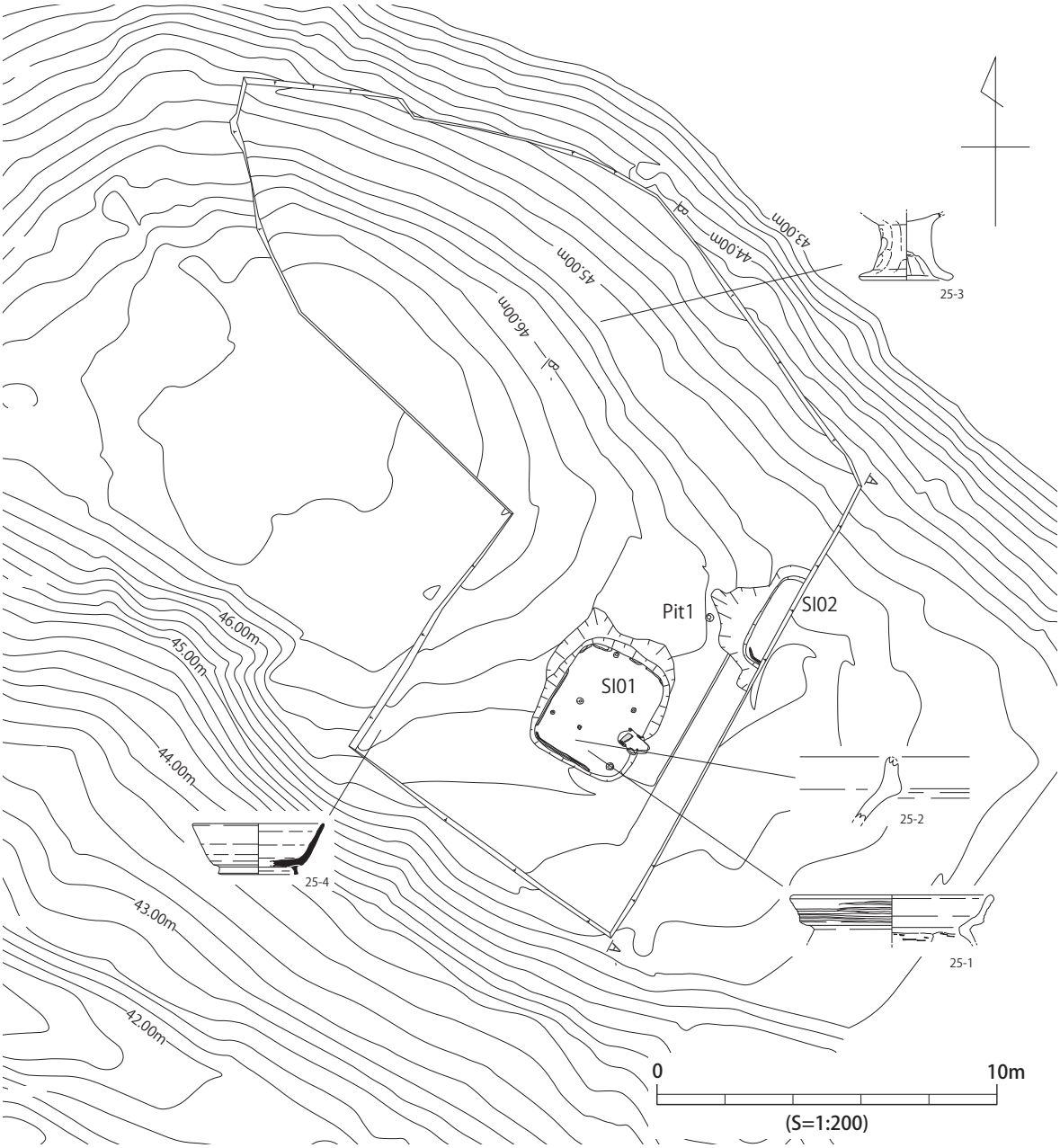
第 21 図　SI02 実測図（1:40）



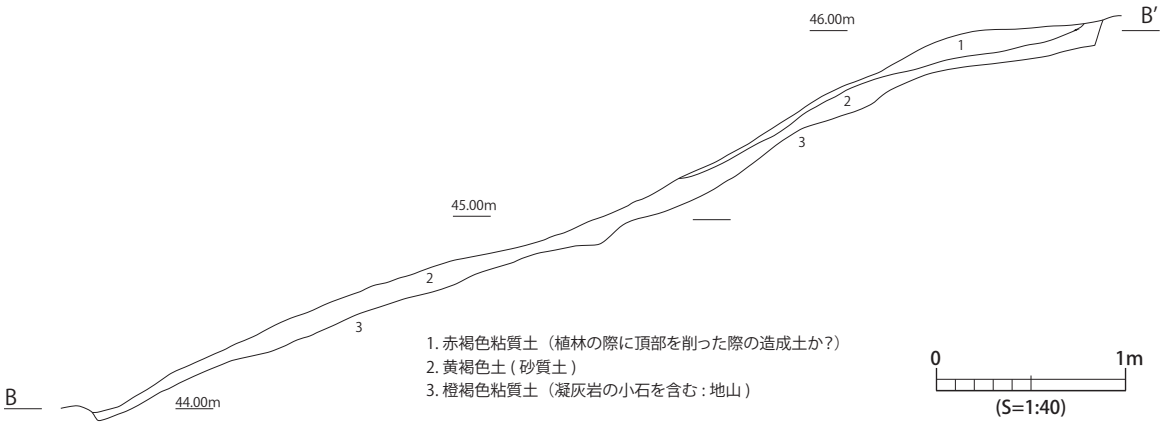
第 22 図　SI02 出土遺物実測図（1:3）

尾根の頂部から東斜面にかけては、地山面を覆う黄灰色砂質土の上に赤褐色粘質土の堆積が見られる部分があり (第 24 図)、造成土と見られる。植林に際して丘陵頂部を削り、その土を東斜面に流していると考えられる。この造成土中からは土師器高坏 (25-3) が出土していることから、丘陵頂部にあった遺構が削平されている可能性がある。

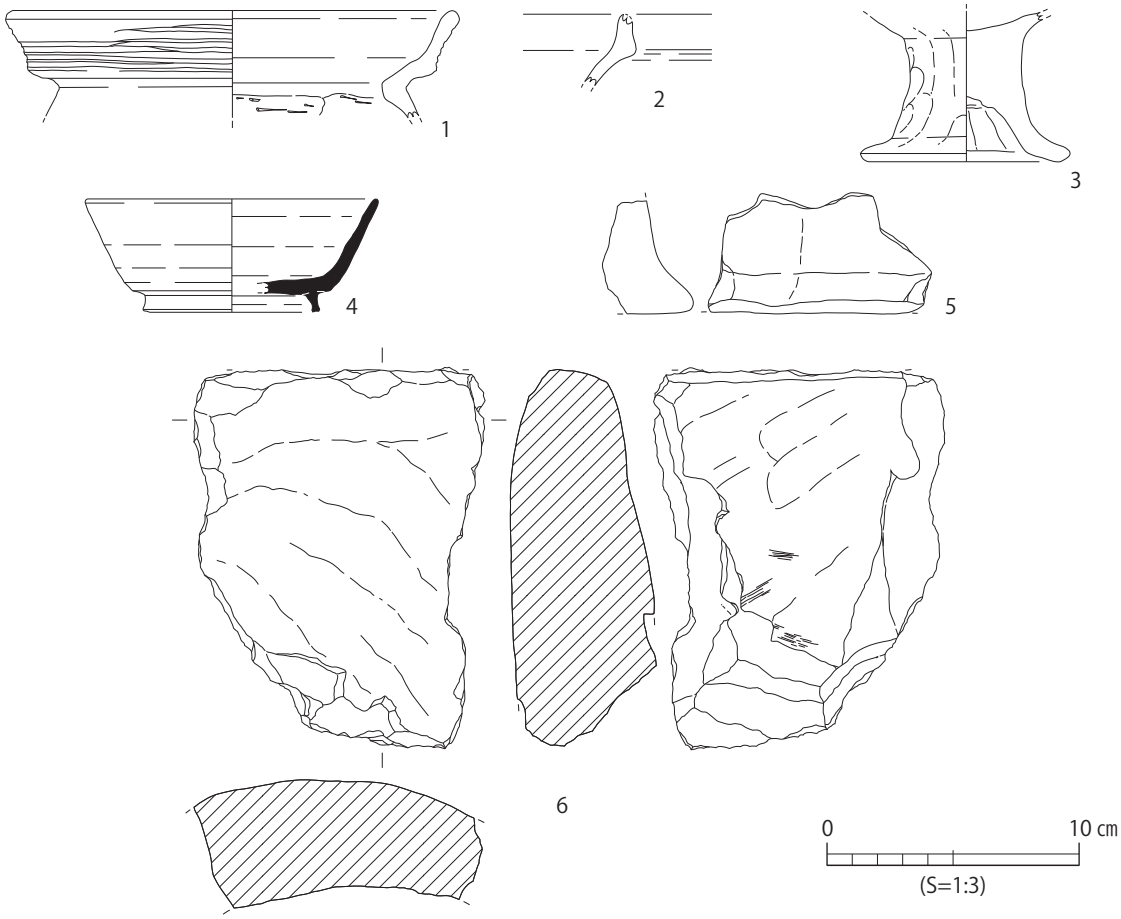
遺構に伴わない遺物　25-1・2 は弥生土器で、いずれも二重口縁甕の破片である。25-1 は口径 17.4cm で、口縁部外面に貝殻復縁による凹線文 4 ～ 6 条が引かれていることにより、端部が肥厚し丸くなっている。内面はヘラ削り調整が施される。25-2 は小片のため復径できなかったが、二重口縁部分が低いタイプの甕である。摩滅しているため、凹線文などは明瞭でない。



第 23 図　城ヶ谷遺跡 (2 区)SI01・02 以外の遺物出土状況（1:200）



第 24 図　東斜面土層断面図（1:40）



第 25 図　遺構に伴わない遺物実測図（1:3）

25-3 は土師器で、高坏の脚部である。底径は 7.6cm と小さく、脚筒部径は 4.5cm と太めで、脚部と坏部の間が厚さ 2.6cm を測る。脚端部も 0.7cm と分厚く、端部付近で明確に外傾する。風化が著しいが、外面はタテ方向の指ナデ痕がわずかに残る。

25-4 は須恵器の高台付坏で、口径 11.4cm、底径 6.4cm、器高 4.5cm を測る。体部は直線的で逆ハ字状に開き、口縁端部はやや先細る。高台は底部のやや内側に貼り付けられ、若干外傾し、接地面がある。また、内面に緑黄色の自然釉が付着し、特に底面に厚く残る。

25-5 は土製品で、土製支脚の基部片である。推定底径は 11.2cm だが、小片のため詳細は不明である。外面は、指による調整が成されている。

25-6 は凝灰岩製の石製品である。円筒形を呈する大形製品の端部の一部分と推測する破片である。推定復元径は 50.0cm で、厚さ 5.6cm、重量 685g を測る。外内面に被熱の痕跡が見られる。大田市波根町の旭山遺跡 (註 1) で、類似した形態の石製品が出土しており、その関連性がうかがわれる。

これらのほか、丘陵頂部から東斜面にかけて、黒曜石のチップが 12 点出土している。いずれも細片で、器種が推定できる破片は見られない。また、縄文土器は出土しなかった。

3. 小結

城ヶ谷遺跡 (2 区) の調査では、竪穴建物跡 2 棟を検出した。このうち SI01 は、造付け竈を備えた竪穴建物で、床面出土の土器から 7 世紀代に機能したと考えられる。また、床面出土の遺物群

とは別に、建物跡が廃絶した後の窪地に、移動式竈などの土器が落ち込んでいたことを確認した。

SI02 は、その大半が調査区外に続くため、遺構の全容は判らないが、土製支脚など多くの遺物を出土した。これら 2 基の竪穴建物跡は、その形状から同時期に機能したと思われる。

平成 26 年度に調査した 1 区の竪穴建物跡 (註 2) は、出土遺物から 7 世紀後半代としている。これらは、傾斜地に造られていることから谷側の壁がなく、形状は若干異なるが、石を構築材に使用した造付け竈を備える構造がよく似ており、2 区の竪穴建物跡と同時期と考えてよいだろう。調査は、道路建設予定地幅に限ったものであるため、集落跡自体は、調査地の南側にさらに延びる可能性が高く、丘陵全域に広がっていた可能性がある。

SI01・02 からは、土師器甕・甑・土製支脚などの煮炊き具とともにミニチュア土器の可能性がある小型の土師器が出土している点が注意される。このような、祭祀具の可能性がある遺物は、同時期の建物跡を検出した 1 区の調査では出土していない。また、SI01・02 とも、床面近くに大きな石が落ち込んでおり、建物の放棄に伴って投げ込まれた可能性がある。埋土中に炭が含まれていることからも、建物が焼失している可能性があり、建物の放棄に伴った儀礼のような行為があったか。

城ヶ谷遺跡 (2 区) の東斜面を中心とする遺物包含層中からは、小片となった黒曜石が出土している。城ヶ谷遺跡の出土遺物に縄文土器は見られないが、近隣には、縄文後期を中心に多量の遺物が出土した中尾 H 遺跡や門遺跡 (註 3) があり、当時の人々の活動範囲を表すと思われる。

〈註〉

(1)『旭山遺跡・中尾 H 遺跡 (3 区)』島根県教育委員会　2016 年

(2)『城ヶ谷遺跡 (1 区)・神谷遺跡・涼見 E 遺跡』島根県教育委員会　2016 年

(3)『門遺跡・高原遺跡 I 区・中尾 H 遺跡』島根県教育委員会　2013 年

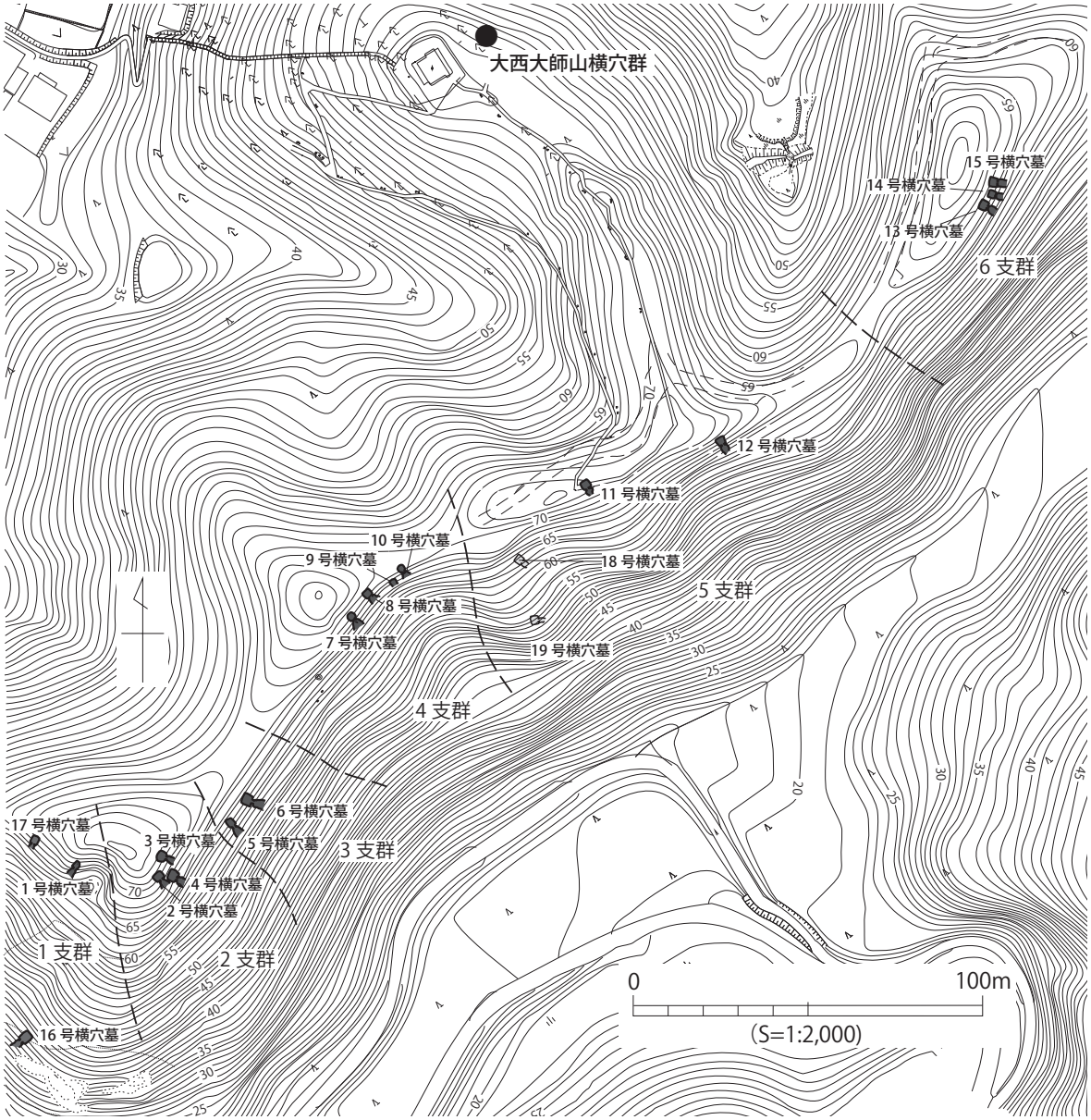
第 5 章　総　　括

1. 大西大師山遺跡（第 18・19 号横穴墓）

平成 28 年度の大西大師山遺跡発掘調査では、2 基の横穴墓について調査を実施した。これらの横穴墓は、いずれも尾根上のピークから大きく下がった位置に造られており、尾根上のピークを後背墳丘としたように見える他の多くの横穴墓とは異なった立地となっていることから、後背墳丘の有無よりも、横穴墓の掘削に適した凝灰岩の存在が優先されたと考えられる。

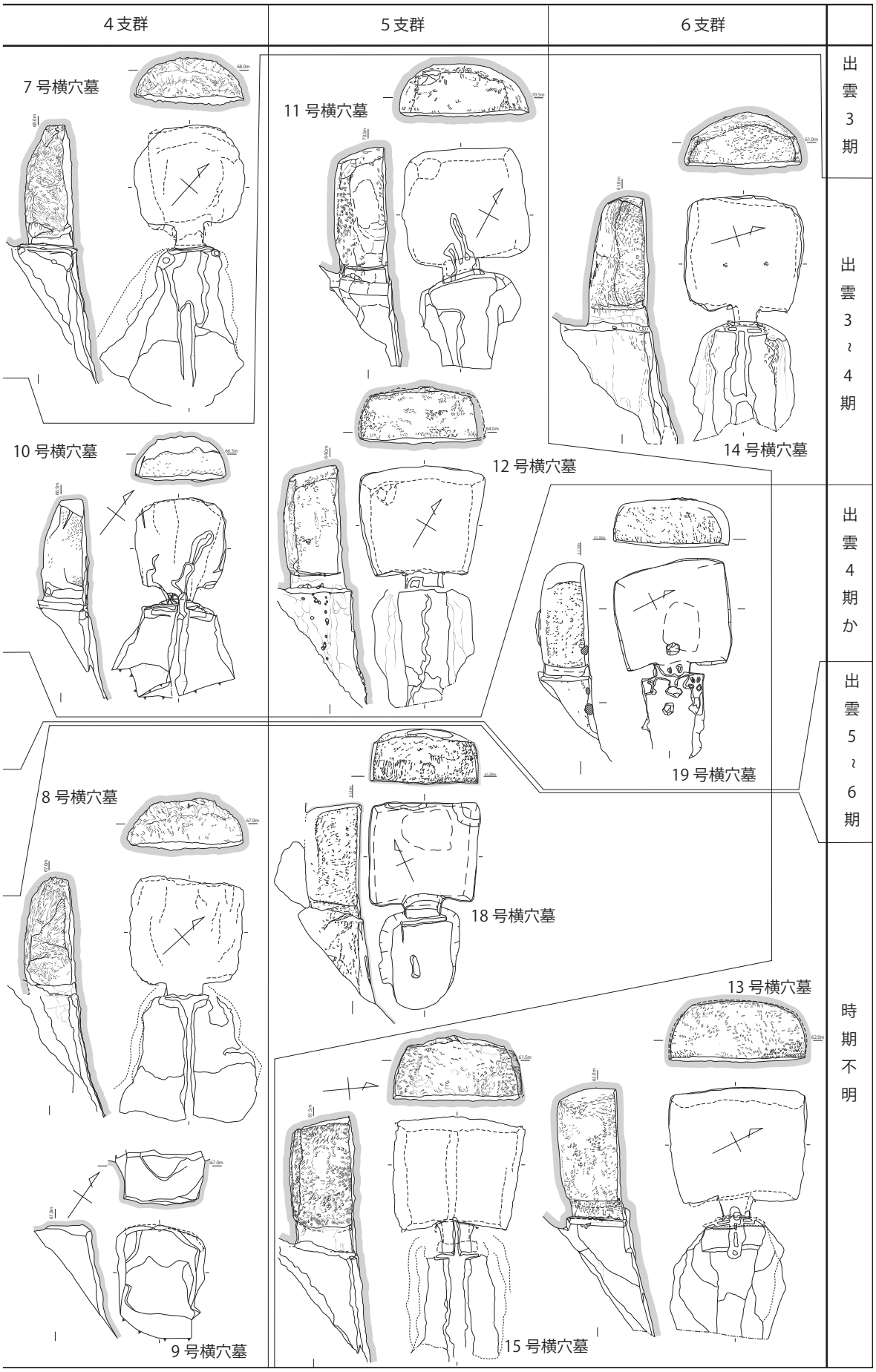
前年度までに調査された 1 ～ 17 号横穴墓は、各壁の界線が明瞭なものは少なく、玄室の平面形も不定形なものが多く見られたのに対し、18・19 号横穴墓の玄室は、壁面を丁寧に調整し、壁毎の界線が明瞭となっている。一方、前庭部は比較的小さく造られ、前方が開く形状にはなっていない。これらの特徴が、18・19 号墓で共通している点は注意される。

前回の報告 (註 1) では、1 ～ 17 号横穴墓について、近接する横穴墓毎に小支群となるまとまりが



第 26 図　大西大師山遺跡横穴墓位置図（1:2,000）

第 27 図　大西大師山遺跡横穴墓一覧（1:120）


4支群
5支群
6支群
出雲3期
出雲3～4期
出雲4期か
出雲5～6期
時期不明
7号横穴墓
10号横穴墓
8号横穴墓
9号横穴墓
11号横穴墓
12号横穴墓
14号横穴墓
19号横穴墓
18号横穴墓
13号横穴墓
15号横穴墓

あると説明しており、その位置関係は第 26 図のとおりである。また、出土遺物が少ないため、時期を推定できる横穴墓も多くはないが、判明している年代観と平面形の関係を第 27 図に示した。これによると、横穴墓の前庭部の形状や玄室の平面形の違いは、時期差よりも、含まれる小支群毎による近似性が強いことが判る。18･19 号横穴墓は、開口方向から見ると 4 支群のピークに向いているが、位置関係からは 11・12 号横穴墓に近く、玄室平面形や前庭部の形状からも 5 支群に含まれると思われる。一方、西隣のピークに開口する 7・8・10 号横穴墓が、隅丸方形から円形に近いような玄室平面形を呈し、前庭部が大きく開くなど、はっきりと異なっており、小支群のまとまりは、開口方向や垂直方向の距離は無関係で、平面的な位置関係が優先されるようである。また、6 支群とした 13 ～ 15 号横穴墓は、玄室の平面形や規模の点で、5 支群の横穴墓と明瞭な違いは見当たらない。同様に、1 ～ 4 支群についても、前庭部先端が開く形状が一貫しており、一連の横穴墓群と見ることができる。

旧波根湖周辺は、石見東部では最大級の横穴墓密集地帯となっている。この地域では、松田谷横穴群 (註 2) で 2 点、諸友大師山横穴群 (註 3) で 1 点の石製紡錘車の出土が知られるなど、大西大師山遺跡 2 号横穴墓を含め、この地域に共通する特徴となっている。一方、横穴墓自体の形状や出土遺物の質・量には差が見られる上、大西大師山遺跡の調査で見られたように、横穴墓群の中でも支群としてのまとまりや小支群毎の違いが見られる。こうした差異が後の安濃郡となるような広域にまたがる政治的なまとまりや、小支群毎の親族関係を思わせる小さなまとまりなど、別々の事情を反映している可能性があり、今後の研究の進展が期待される。

2. 城ヶ谷遺跡（2 区）

城ヶ谷遺跡 (2 区) の調査では、7 世紀代の竪穴建物跡 2 棟を検出したほか、黒曜石片、弥生土器、用途不明の石製品などが出土した。

今回の調査では縄文土器は出土しなかったが、近隣には、中尾 H 遺跡や門遺跡 (註 4) など縄文時代の遺物を多量に遺跡が知られており、縄文時代の集落があったと考えられることから、城ヶ谷遺跡での黒曜石片の出土は、縄文時代に生活した人々の活動範囲を示すと考えられる。

SI01 からは、V -3 様式の弥生土器甕の小片 2 点が出土している。同時期の遺物は、鈴見 B 遺跡 (1 区) や荒槇遺跡 (註 5) の遺物包含層などにも含まれており、周辺に弥生時代後期の墳墓や集落跡があった可能性があるが、城ヶ谷遺跡でも遺構は確認できなかった。

同様に、土師器高坏 (25-3) についても、SI01・02 よりも古い、古墳時代中期頃のものと思われる。城ヶ谷遺跡 (2 区) の谷を挟んだ南東側の丘陵上には涼見 E 遺跡 (註 6) があり、方墳 2 基が調査されている。いずれも主体部は明らかでないが、墳丘上から土師器小型丸底壺と思われる小片が出土しており、中期の古墳と考えられることから、城ヶ谷遺跡 (2 区) の側にも同様の古墳が存在した可能性がある。旧波根湖の周辺は、横穴墓が非常に多く分布することが知られている一方、墳丘を有する古墳は、涼見 E 遺跡のほか、竹原古墳 (註 7) しか知られていなかった。しかし、近隣の荒槇遺跡や鈴見 B 遺跡などで、古墳時代前・中期に遡る遺物が出土しており、こうした時期の集落や古墳が存在した可能性が高い。

城ヶ谷遺跡 (2 区) で検出した 2 棟の竪穴建物跡は、出土した須恵器などから 7 世紀後半代のものと考えられる。このうち、SI02 は部分的な調査であったため、造付け竈が備わっていたかどう

かを断定できないが、SI01 の状況や、1 区での調査結果から考えると、造付け竈を備えている可能性が高い。SI02 からは土製支脚 2 点が出土していることから、造付け竈と土製支脚を併用した可能性も考えられる。一方、移動式竈は、SI01 が埋没した後に落ち込んだもので、SI01 に直接伴う遺物ではない。SI01 との間に大きな時期差は無いと考えられるが、少なくとも SI01 では造付け竈と同時併用はしていない点が注意される。出土遺物には、ミニチュア土器甑・甕の可能性がある小型の土師器が含まれている。こうした遺物は、近い時期に機能していたと思われる 1 区の建物跡からは出土しておらず、尾根上に位置する SI01・02 の特性を示す可能性がある。SI01・02 の床面近くの埋土には炭を含んおり、建物が焼失した可能性があるほか、建物跡が埋没する過程で人頭大の石が投げ込まれていると思われ、建物の放棄に伴う儀礼が行われた可能性を示している。

本書で報告した両遺跡の位置する旧波根湖の沿岸地域は、石見地方東部最大級の横穴墓密集地帯であるが、横穴墓が急増する古墳時代後期以前の遺跡は比較的少なく、一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査においても、包含層中からの遺物の出土はあっても、集落跡や墳墓はほとんど確認されていない。こうしたことから、古墳時代後期以降に、急速に開発が進展した地域と見ることができ、城ヶ谷遺跡や周辺で見られる古墳時代後期を中心とする集落跡の様相は、そうした状況を反映している。

平成 22 年度から７年間にわたって実施してきた一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査では、縄文時代から中近世、さらには近現代の陶器・瓦工房も含む様々な遺跡の様相を明らかにしてきた。中でも古墳時代後期～古代の遺跡については、非常に多くの資料を提供したと言える。本報告の城ヶ谷遺跡をはじめ、市井深田遺跡や鈴見 B 遺跡などでは、当時の集落跡の様相を明らかにしてきたが、これらの集落跡の調査からは、近隣にある近い時代の集落跡であっても、竈や土製支脚の使用状況、移動式竈の形状が異なっていた可能性があるなど、村単位とも言うべき差異をうかがうことができた。同時に、大西大師山遺跡や周囲の横穴墓の様相は、旧波根湖周辺に広がる政治的なまとまりの中に、家族墓的な小支群が輻輳している様子も見え、重層する社会構造を検討できる可能性が見えてきた。本書をはじめ、一般国道９号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の各報告書が地域の歴史を解明する一助となることを期待したい。

〈註〉

(1) 『大西大師山遺跡』島根県教育委員会　2016 年

(2) 『大田市松田谷横穴群』島根県教育委員会　1982 年

「Ⅲ松田谷横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会　1970 年

(3) 『諸友大師山横穴群』大田市教育委員会　1983 年

「Ⅳ諸友大師山横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会　1970 年

(4) 『門遺跡・高原遺跡Ⅰ区・中尾Ｈ遺跡』島根県教育委員会　2013 年

『旭山遺跡・中尾Ｈ遺跡 (3 区)』島根県教育委員会　2016 年

(5) 『市井深田遺跡・荒槇遺跡・鈴見Ｂ遺跡 1 区』島根県教育委員会　2014 年

(6) 『城ヶ谷遺跡 (1 区)・神谷遺跡・涼見Ｅ遺跡』島根県教育委員会　2016 年

(7) 『島根県埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会　1970 年

(8)　岩橋孝典「山陰地方の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について－土製支脚･移動式竈を中心として－」『古代文化研究』１１　島根県古代文化センター　2009 年

岩橋孝典「山陰地方の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について２－土製支脚・移動式竈を中心として－」『古代文化研究』１２　島根県古代文化センター　2010 年

岩橋孝典「土製支脚の分布状況と古代行政境界－６世紀から８世紀の出雲国東部・伯耆国西部の状況から－」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター　2010 年

第 1 表　大西大師山遺跡 (19 号横穴墓) 出土遺物観察表

挿図番号	図版番号	遺構名	出土層位	種別	器種	口径	底径	器高	最大径	調整及び手法	胎土	焼成	色調	備考
10-1	10	19 号前庭部	黄褐色砂質土	須恵器	坏	(15.8)				(外)回転ナデ (内)回転ナデ	2mm 以下白・灰色砂粒含	良	(外)黒 N2/ (内)灰 N4/	
10-2	10	19 号前庭部	黄褐色砂質土	須恵器	甕	(11.6)				(外)回転ナデ (内)回転ナデ	2mm 以下白・灰色砂粒少含	良	(外)黒 N2/ (内)灰 N4/	
10-3	10	19 号	黄褐色砂質土	須恵器	坏蓋				天井径 (6.0)	(外)板状圧痕・回転ナデ (内)回転ナデ	砂粒多含	良	(外)灰 N5/ (内)青灰 5BG5/1	

第 2 表　城ヶ谷遺跡 (2 区) 出土遺物観察表

挿図番号	図版番号	遺構名	出土層位	種別	器種	口径	底径	器高	最大径	調整及び手法	胎土	焼成	色調	備考
15-1	19	SI01	上層	須恵器	蓋	(13.0)			カエリ径 (11.2)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	1mm 以下砂粒少含	やや不良	(外)灰白 5Y7/1 (内)灰白 5Y8/1	
15-2	19	SI01	上層	須恵器	高坏		(8.8)			(外)回転ナデ (内)回転ナデ	砂粒少含	良	(外)灰 5Y6/1 (内)灰白 5Y7/2	
15-3	19	SI01	上層	土師器	ミニチュア製品	3.7	2.5	4.1		(外)手づくね成形・指頭圧痕 (内)手づくね成形・指頭圧痕	2mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/8 (内)明赤褐 5YR5/6	甑のミニチュアか
15-4	19	SI01	上層	土師器	甕	(17.4)				(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ・ヘラ削り	2mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/6・褐灰 7.5YR4/1 (内)橙 7.5YR6/8	口縁部外面:一部スス付着
15-5	19	SI01	上層	土師器	甕	(14.6)		11.8	(14.4)	(外)ヨコナデ・ヨコ方向ハケ目 (内)ヨコナデ・ヘラ削り	2mm 以下白・灰色砂粒少含	良	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6・明赤褐 5YR5/6	口縁部・胴部外面:スス付着
15-6	20	SI01	上層	土師器	移動式竈	31.5		(23.7)	胴部径 (37.0)	(外)ヨコナデ・ナデ・指頭圧痕 (内)ヨコナデ・ヘラ削り	5mm 以下白・灰色砂粒・金雲母多含	良	(外)橙 7.5YR7/6・明赤褐 5YR5/8 (内)橙 7.5YR7/6	焚口・基部欠損 / 庇が大きい
19-1	21	SI01	下層	須恵器	蓋	11.1		4.1	天井径 6.4	(外)回転ヘラ削り・回転ナデ (内)多方向仕上げナデ・回転ナデ	2mm 以下白・灰色砂粒少含	良	(外)灰 5Y6/1・黄灰 2.5Y5/1 (内)灰白 N7/	ほぼ完形
19-2	21	SI01	下層	須恵器	短頸壺	7.5	6.5	9.3	12.5	(外)回転ナデ・回転ヘラ削り (内)回転ナデ	3mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)灰 5Y6/1・灰白 5Y8/1 (内)灰 N6/1	ほぼ完形
19-3	21	SI01	下層	土師器	坏	(9.6)	(5.0)	3.5		(外)ナデか (内)ナデか	2mm 以下白色砂粒少含	良	(外)橙 7.5YR6/8 (内)黄橙 7.5YR7/8	風化顕著
19-4	21	SI01	下層	土師器	坏	11.3	3.4	4.3		(外)ナデか (内)ナデか	2mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/8・赤褐 5YR4/6	ほぼ完形
19-5	21	SI01	下層	土師器	ミニチュア製品	8.7	4.7	8.9		(外)ナデ・指頭圧痕 (内)ナデ・指頭圧痕・しぼり	3mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/6・明赤褐 5YR5/6・5/8 (内)橙 7.5YR6/6	ほぼ完形 / 甑のミニチュアか
19-6	22	SI01	下層	土師器	甕	(32.4)			胴部径 (27.3)	(外)ヨコナデ・タテ方向ハケ目 (内)ヨコナデ・ヘラ削り	2mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	口縁部内面・胴部外面:スス付着
19-7	22	SI01	下層	土師器	甕	(25.0)			胴部径 (24.8)	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ・ヘラ削り	2mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/8・明赤褐 5YR5/6 (内)橙 7.5YR6/8	
19-8	21	SI01	下層	土師器	把手					(外)ナデ・指による成形 (内)ヘラ削り	4mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/6 (内)明赤褐 5YR5/8・にぶい褐 7.5YR5/3	甑か / 把手上方:スス付着

挿図番号	図版番号	遺構名	出土層位	種別	器種	口径	底径	器高	最大径	調整及び手法	胎土	焼成	色調	備考
22-1	23	SI02		須恵器	高坏	(15.8)	(12.6)			(外)回転ナデ・回転ヘラ削り・板状圧痕 (内)回転ナデ・多方向ナデ	砂粒少含	良	(外)灰白 5Y7/2 (内)灰白 5Y7/1	
22-2	24	SI02		土師器	ミニチュア製品	4.3 ～ 4.7	2.7	4.9		(外)手づくね成形・指頭圧痕 (内)手づくね成形・指頭圧痕	2mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/8 (内)明赤褐 5YR5/8	完形 / 上下端部 : 一部スス付着
22-3	24	SI02		土師器	ミニチュア製品	(5.4)	5.0	5.0		(外)手づくね成形・ヘラ削り (内)ナデ・ヨコ方向ハケ目	2mm 以下白色砂粒多含	良	(外)明褐 7.5YR5/8 (内)橙 7.5YR6/8	半分 : スス付着
22-4	23	SI02		土師器	甕	(20.0)				(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ・ヘラ削り	3mm 以下白・灰色砂粒少含	良	(外)橙 7.5YR6/8・明赤褐 5YR5/6 (内)橙 7.5YR6/8	
22-5	23	SI02		土師器	把手					(外)ナデ・指による成形 (内)ヘラ削りか	4mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/8・灰黄褐 10YR5/2 (内)橙 5YR6/6	甑か / 把手上方 : スス付着
22-6	24	SI02		土製品	土製支脚		13.9 ～ 15.4	17.2	胴部径 8.9	(外)滑らかな指ナデ・指頭圧痕 (内)荒い指ナデ・抉り	3mm 以下白色砂粒多含	良	(外)明黄褐 10YR6/8・明赤褐 2.5YR5/8 (内)明黄褐 10YR6/8	完形 / 穿孔(貫通)
22-7	24	SI02		土製品	土製支脚		(13.2)	17.4	胴部径 8.7	(外)滑らかな指ナデ・指頭圧痕 (内)荒い指ナデ・抉り	5mm 以下白・灰色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/8・赤褐 2.5YR4/8 (内)明赤褐 5YR5/6	穿孔(不貫通)
25-1	25	遺構外		弥生土器	甕	(17.4)				(外)ヨコナデ・凹線 4 ～ 6 条 (内)ヨコナデ・ヘラ削り	2mm 以下白色砂粒少含	良	(外)明黄褐 10YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	二重口縁
25-2	25	遺構外		弥生土器	甕					(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	3mm 以下白色砂粒多含	良	(外)浅黄橙 10YR8/4 (内)浅黄橙 10YR8/4・橙 7.5YR7/6	二重口縁
25-3	25	遺構外	黄褐色土	土師器	高坏		7.6		脚部径 4.5	(外)指ナデか (内)しぼり	2mm 以下白色砂粒多含	良	(外)橙 7.5YR6/8 (内)橙 7.5YR6/6	脚部のみ残存
25-4	25	遺構外	黄褐色土	須恵器	高台付坏	(11.4)	(6.4)	4.5		(外)回転ナデ・貼付高台 (内)回転ナデ	2mm 以下砂粒少含	良	(外)灰白 7.5Y7/1・灰 5Y5/1 (内)灰 5Y5/1	内面 : 自然釉
25-5	26	遺構外	黄褐色土	土製品	土製支脚		11.2			(外)指による成形	3mm 以下白・灰・黄色砂粒多含	良	(外)明黄褐 10YR6/6・明赤褐 5YR5/8	
25-6	26	遺構外	表土	石製品		長 (15.1)	幅 (11.5)	厚み (5.6)	重量 685g	推定口径 50.0cm			(外)灰白 5Y8/1 (内)灰黄 2.5Y6/2	端部 : スス付着

写　真　図　版

18 号横穴墓発見直後の状況（東から）

18 号横穴墓発見直後の内部の状況（天井から玄門付近を見る ）

図版２　大西大師山遺跡

18 号横穴墓前庭部土層堆積状況（南東から）

18 号横穴墓玄室内土層堆積状況（南東から）

18 号横穴墓閉塞石の状況（南から）

18 号横穴墓閉塞部（南から）

18 号横穴墓閉塞石除去状況 (南から)

図版 4　大西大師山遺跡

18 号横穴墓前庭部完掘状況 (北から)

18 号横穴墓前庭部完掘状況 (南から)

18 号横穴墓前庭部作業風景 (南東から)

18 号横穴墓右側壁

18 号横穴墓右前壁～右側壁

18 号横穴墓左側壁～奥壁

18 号横穴墓奥壁の加工痕

図版 6　大西大師山遺跡

19 号横穴墓発見直後の状況 (東から)

19 号横穴墓前庭部土層堆積状況 (東から)

19 号横穴墓玄門付近土層堆積状況 (東から)

19 号横穴墓玄門付近 (南東から)

19 号横穴墓前庭部 (東から)

19 号横穴墓前庭部完掘状況 (南東から)

図版８　大西大師山遺跡

19 号横穴墓閉塞部右壁

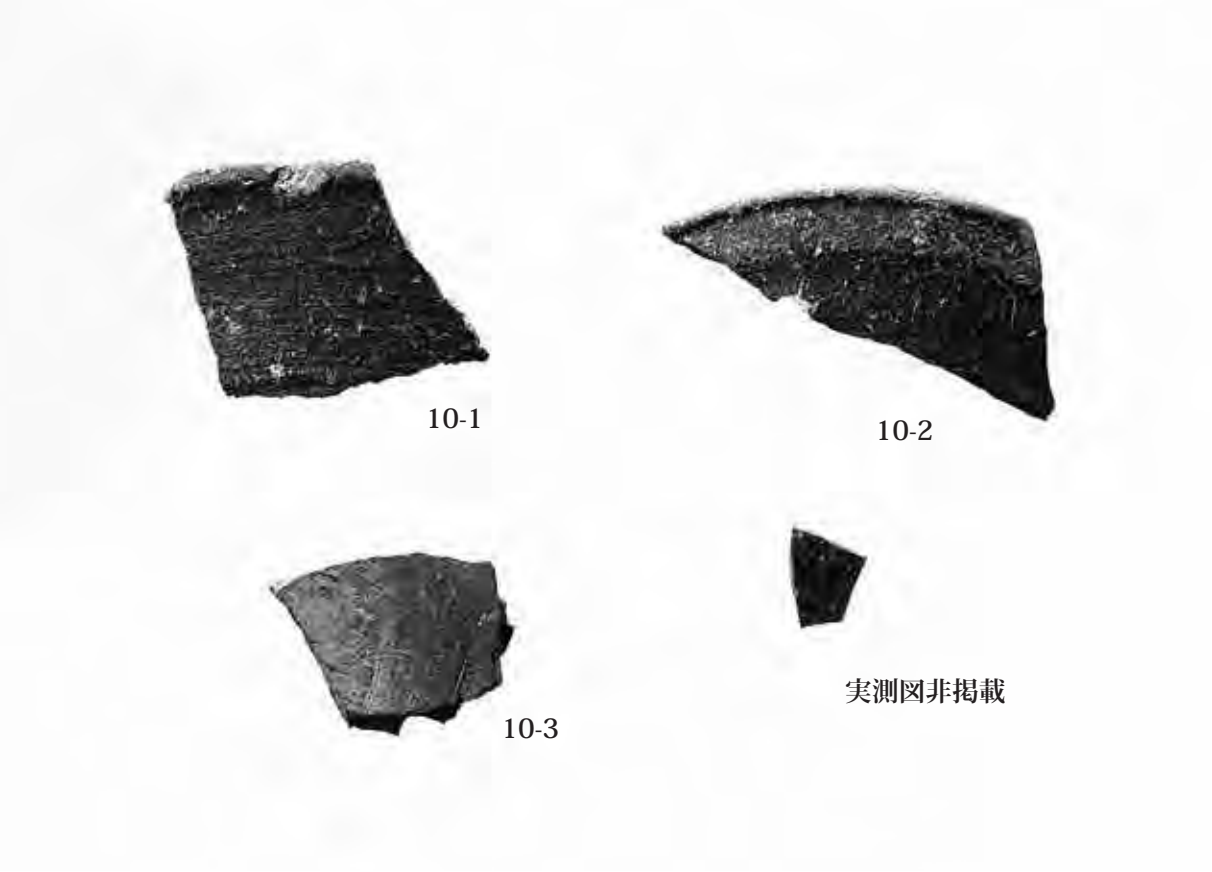
19 号横穴墓左前壁～右側壁

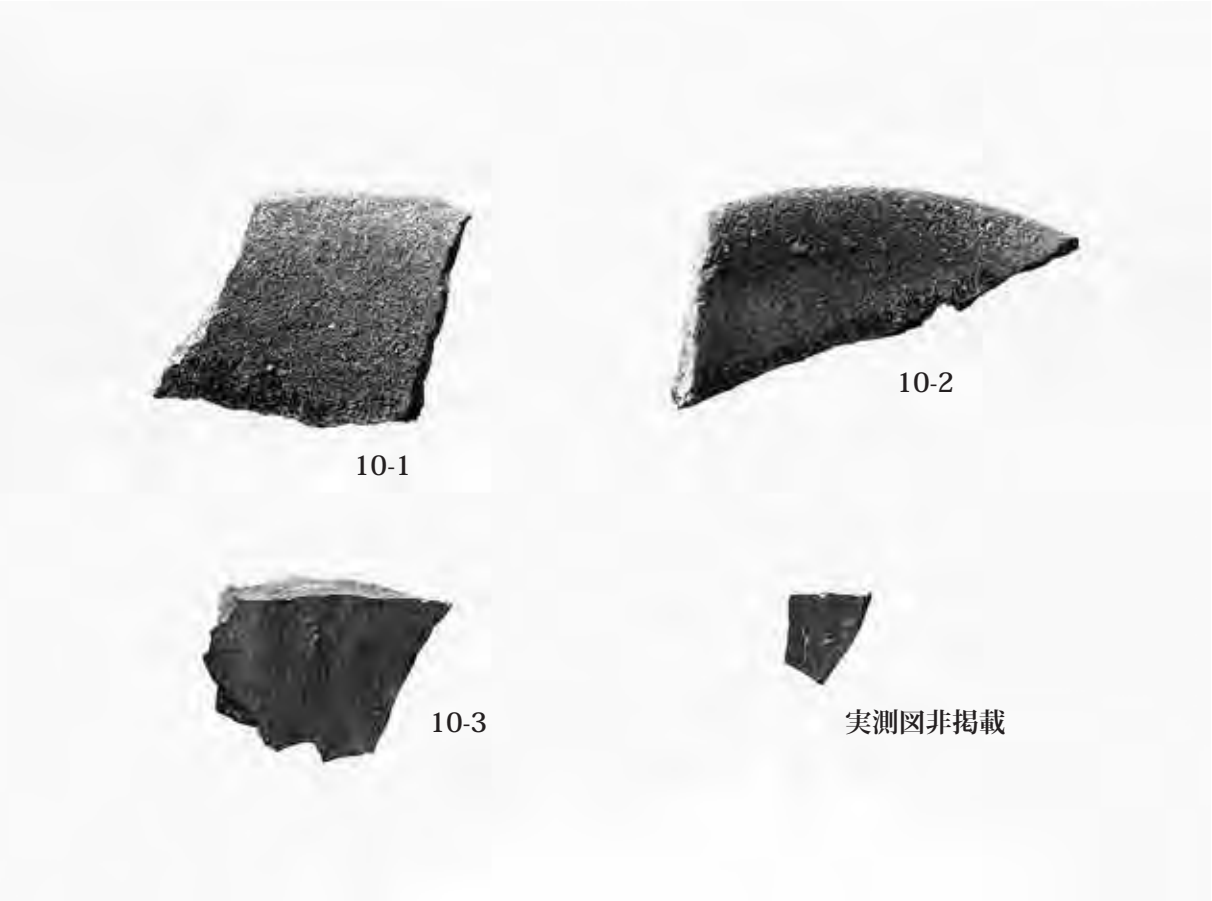
19 号横穴墓左側壁

19 号横穴墓完掘状況 (南から)

19 号横穴墓調査後遠景 (東から)

図版 10　大西大師山遺跡





19 号横穴墓出土須恵器

調査前全景 (東から)

調査前近景 (西から)

南壁土層堆積状況 (SI02 付近)

図版 12　城ヶ谷遺跡（2 区）

SI01 上層土層堆積状況 (西から)

SI01 上層土層堆積状況 (北から)

SI01 上層遺物出土状況 (北から)

SI01 上層遺物出土状況 (西から)

SI01 土層堆積状況 (西から)

SI01 土層堆積状況 (北から)

SI01 遺物出土状況 (南から)

SI01 作業風景 (西から)

図版 14　城ヶ谷遺跡（2 区）

SI01 遺物出土状況 (西から)

SI01 造付け竈土層断面 (西から)

SI01 造付け竈検出状況 (北から)

SI01 造付け竈完掘状況 (北西から)

SI01 床面検出状況 (北から)

SI01 完掘後作業風景 (北から)

図版 16　城ヶ谷遺跡（2 区）

SI01 完掘状況 (北から)

SI02 付近土層堆積状況 (北から)

SI02 検出状況 (東から)

SI02 作業風景 (東から)

SI02 遺物出土状況 (西から)

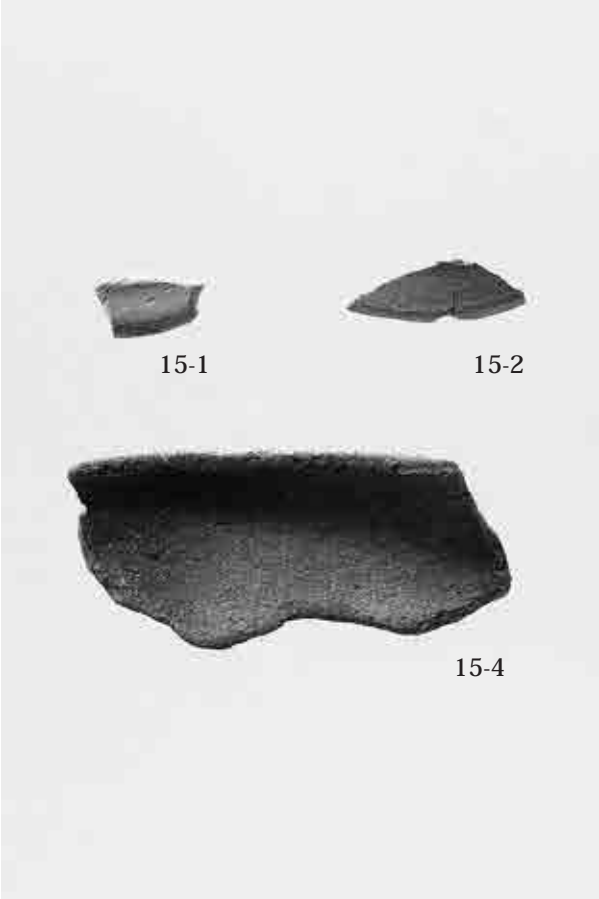
SI02 完掘状況 (北から)

図版 18　城ヶ谷遺跡（2 区）

ピット 01 土層断面 (北から)

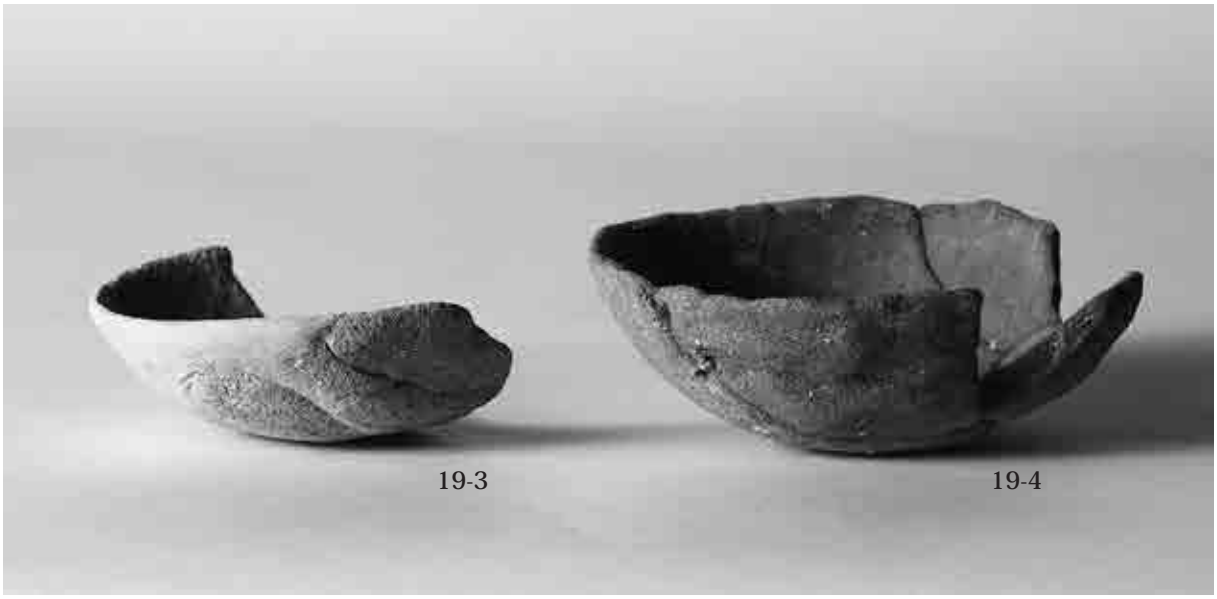
東斜面土層堆積状況 (北から)

城ヶ谷遺跡 (2 区) 空撮 (東から)

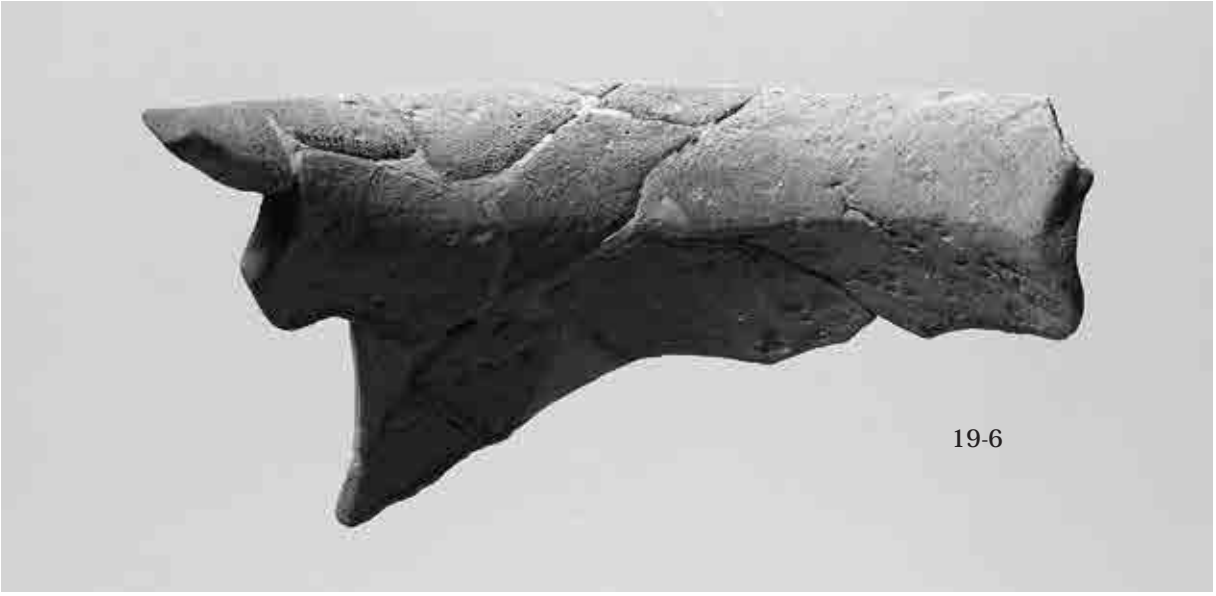


SI01 上層出土遺物 (1)

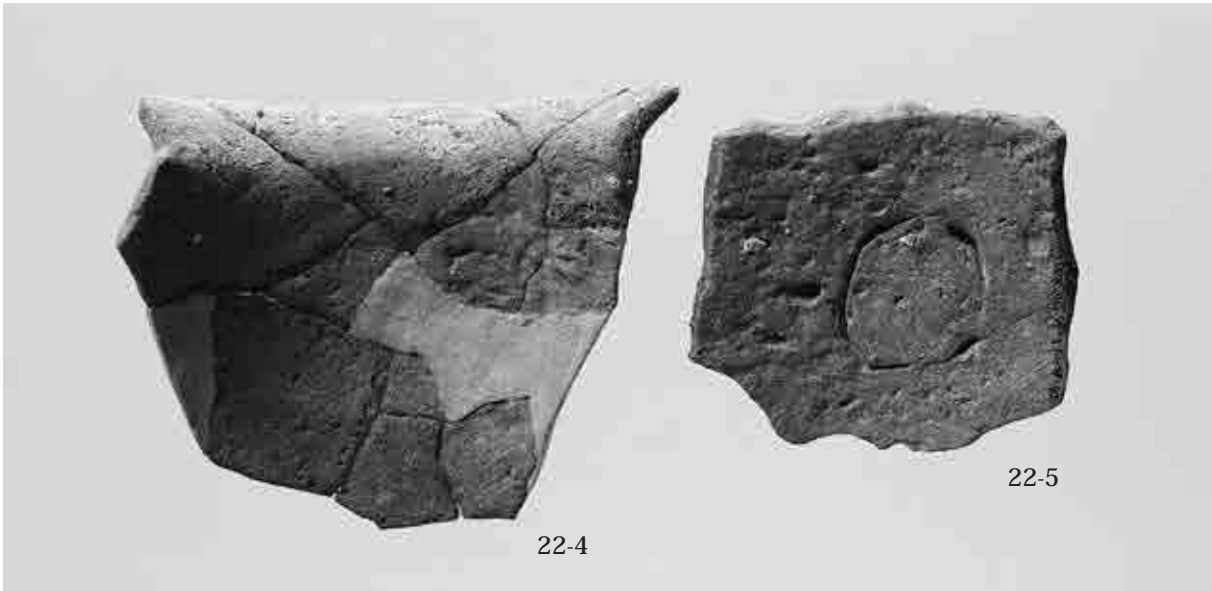
SI01 上層出土遺物 (2)



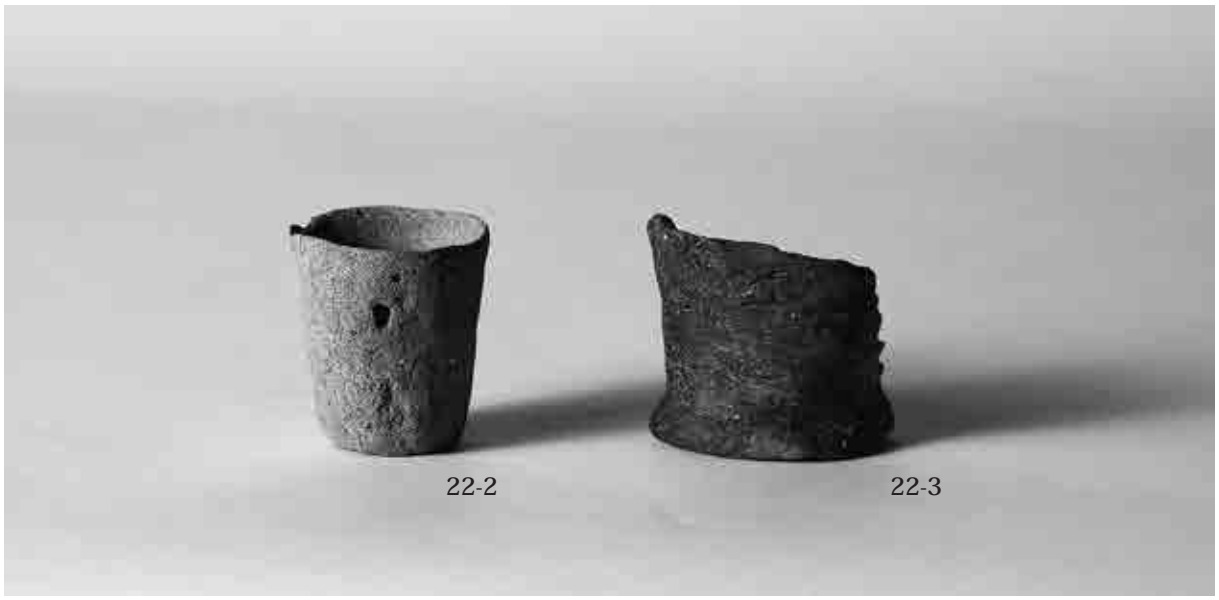
SI01 出土遺物 (1)



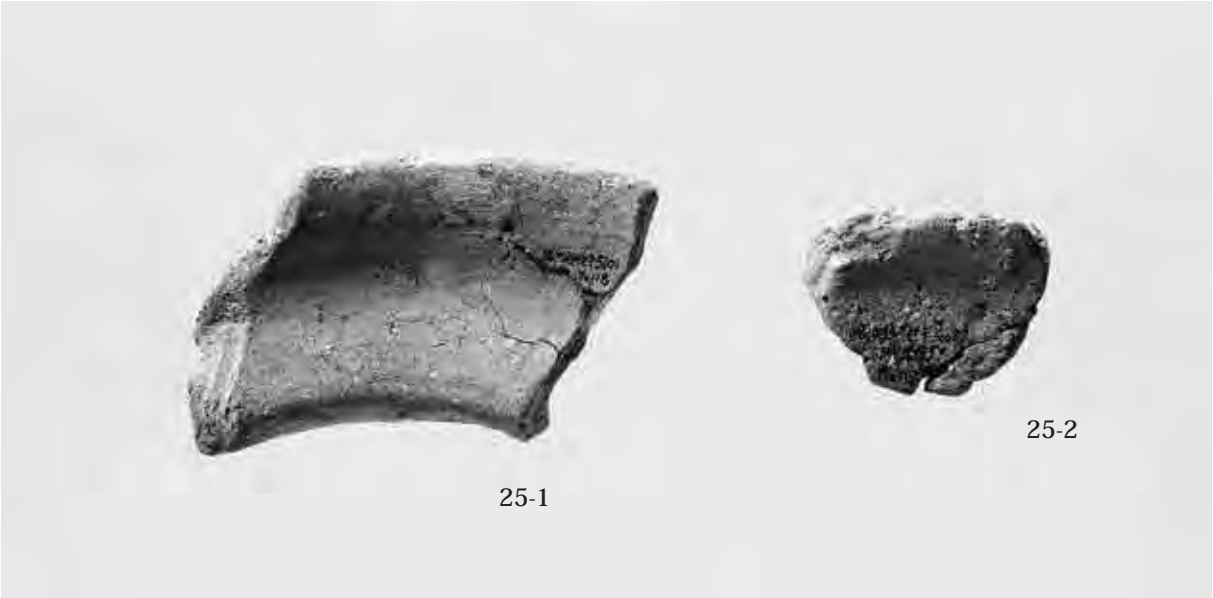
SI01 出土遺物 (2)



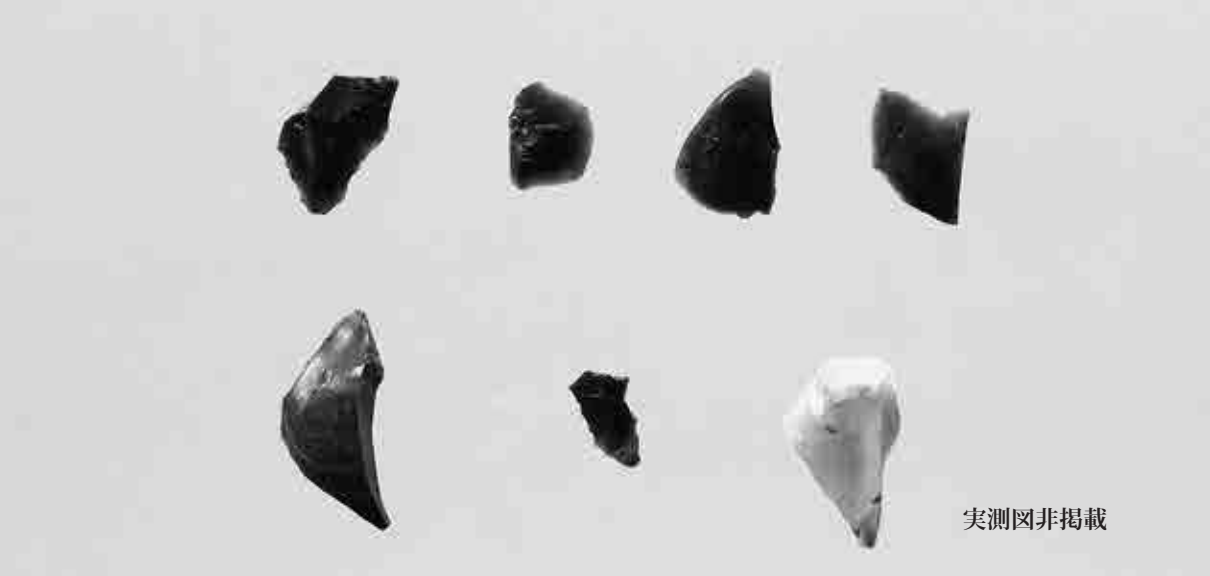
SI02 出土遺物 (1)



SI02 出土遺物 (2)

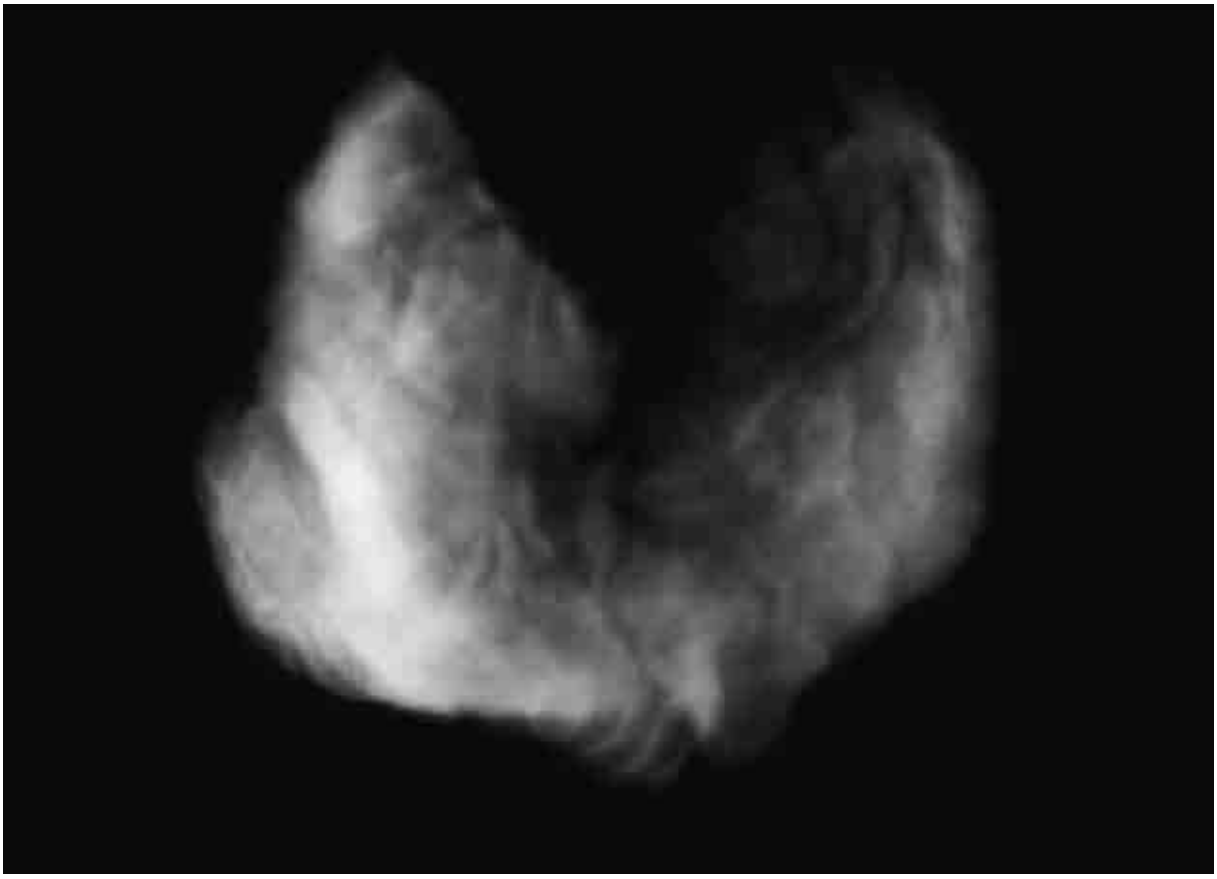


遺構に伴わない遺物 (1)



遺構に伴わない遺物 (2)

大西大師山遺跡 17 号横穴墓出土柄頭または鞘尻金具の一部



柄頭または鞘尻金具の一部　X 線画像

報告書抄録

ふりがな	おおにしだいしやまいせき（18・19 ごうよこあなぼ）・じょうがたにいせき（2 く）
書名	大西大師山遺跡（18・19 号横穴墓）・城ヶ谷遺跡（2 区）
シリーズ名	一般国道 9 号 (朝山大田道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	9
編著者名	林　健亮・秦　愛子
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
	http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
所在地	〒　690-0131　島根県松江市打出町 33 番地
	E-mail:maibun@pref.shimane.lg.jp
発行年月日	2017(平成 29) 年 6 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおにしだいしやま 大西大師山 いせき 遺跡	しまねけん　おおだし　くてちょう 島根県　大田市　久手町 はねにし 波根西	32205	A354	35° 13′ 27″	132° 31′ 55″	20161020 ～ 20161028 20161128 ～ 20170120	90㎡	道路建設
じょうがたにいせき 城ヶ谷遺跡	しまねけん　おおだし　くてちょう 島根県　大田市　久手町 さつか 刺鹿	32205	A359	35° 13′ 22″	132° 30′ 55″	20161206 ～ 20170120	230㎡	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大西大師山遺跡（18・19 号横穴墓）	横穴墓	古墳時代	横穴墓 2 基	須恵器	凝灰岩の露頭に掘られた横穴墓群。
城ヶ谷遺跡 (2 区)	集落	古墳時代	竪穴建物跡 2 基	土師器・須恵器	7 世紀の集落。造付け竈を備えた竪穴建物跡。ミニチュア土器や移動式竈を出土。

要約

大西大師山遺跡では、古墳時代の横穴墓 2 基を調査した。前回の調査を含め、計 19 基の横穴墓を調査したことになる。尾根から大きく下がった位置に掘られ、過去に調査された横穴墓に比べ、丁寧に整形されている。

城ヶ谷遺跡では 7 世紀代と考えられる 2 基の竪穴建物跡を検出した。このうち 1 基には造付け竈が備えられている。出土遺物には土師器甕や土製支脚などの煮炊具のほか、ミニチュア土器と思われる土師器を含んでいる。

(緯度・経度は世界測地系による）

大西大師山遺跡（18・19 号横穴墓）・城ヶ谷遺跡 (２区)

一般国道 9 号 (朝山大田道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9

発行　2017(平成 29) 年 6 月
発行者　国土交通省中国地方整備局松江国道事務所
島根県教育委員会
編集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒 690-0131　島根県松江市打出町 33 番地
電話　0852-36-8608
http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
印刷　有限会社　古浦印刷